VIEW21

2008 June 6月

高校版 Volume 2

CONTENTS

2 私を育てたあの時代、あの出会い

志がかけがえのない出会いを生み 時を濃密にした
島根県立益田高校校長◎柴田 博

4 特集

「自立する高校生」をどう育てるのか
実態編――学生満足度調査からわかる自立の現状

6 高校現場より
自立できない 自立したがらない 今の生徒たち

8 Benesse教育研究開発センター「学生満足度調査」より
高校生・大学生の自立度
Benesse教育研究開発センター特別顧問◎高田正規

14 編集部より
高校生が自立に向かうために必要な視点

16 データで見る中学校

5年前と比べ、中学校での家庭学習指導や宿題の頻度は増加
Benesse教育研究開発センター「第4回学習指導基本調査」より

17 指導変革の軌跡

18 三重県立川越高校
自立した学習者を育てる◎「受験は団体戦」を不易の目標とし 生徒の変化に応じた指導の再構築を目指す

22 長崎県立猶興館高校
推薦入試対策指導の確立◎「推薦入試」という目標に向かって 教師と生徒が一つになった

26 神奈川県立菅高校
組織的な生徒指導による学校改革◎「やればできる」教師の思いが学校を変え 朝読書の成功で改革はより加速した

30 10代のための「学び」考

星野英一 東京大名誉教授、日本学士院会員
小さな疑問を粘り強く考え抜くことが学問の進歩を生み出す

32 未来をつくる大学の研究室

社会心理学 北海道大大学院 文学研究科 人間システム科学専攻・行動システム科学専修

36 VIEW'S REPORT

地方公立高校の挑戦 岩手県立久慈高校／広島県立三次高校

43 教える現場、育てる言葉

クレームとエピソードを通じて伝承される接客の精神
能登 和倉温泉◎加賀屋

46 生きたデータの見せ方・つくり方

受験へ向けた3年生保護者への意識付け

56 VIEW'S SQUARE

本誌記載の記事、写真の無断複写、複製および転載を禁じます。

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

私が松江北高校に赴任したのは42歳のときでした。

それまでの経験から、これからの高校には進学指導についての確かな見識とそれを具体化する方法論、更に教師全員を巻き込む学校の組織化と教育活動の整備が必要であると感じていた私は、全国屈指の進学実績を誇る同校でそれを学べると期待していました。

当時同校は、担任が互いに対抗意識を抱く群雄割拠の時代からの脱却を図っていました。その変革の中心にいたのが当時の進路指導部長の鞍嶋先生でした。「個人技では限界がある。みんなで知恵と力を出し合って臨まなければ課題は解決しない」と、的確な場面を捉えて発言される。すると、経験豊富で優れた指導力を持つ教師たちが一斉に顔を上げて耳を傾ける。「人を動かす」とは、課題から目をそらさず、それを皆で解決していこうと訴えることから始まると、改めて感じました。

もっともそれには、課題を「課題」として捉える視点と発想の共有が不可欠です。私たちの指

私を育てた
あの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

志がかけがえのない出会いを生み時を濃密にした

島根県立益田高校校長 柴田 博 SHIBATA HIROSHI

学校の歴史は、出会いと別れによってつくられる。だが、邂逅のときは志を持った者だけに訪れる……。旧制中学以来の歴史を誇る全国有数の進学校であり、カリキュラムや学校組織の改革に先駆的に取り組んできた島根県立松江北高校で進路指導部長などを歴任し、現在は島根県立益田高校校長を務める柴田博先生に、教師としての出会いと成長についてうかがった。

右 かわしま・ひろあき　松江北高校校長をはじめ、島根県内の高校の校長、教頭、進路指導部長、東出雲町教育委員会教育長などを歴任。島根県の教育改革の主導的役割を果たす。07年より東出雲町長。

左 しばた・ひろし　英語科。松江北高校には10年間勤務。進路指導部長などを務め、同校の進路指導の中心的役割を担う。在任9、10年目、同校は全国の公立高校で最多となる国公立大合格者を送り出す。05年度より益田高校校長を務める。

先輩教師の言葉

互いの言動を認め勇気を与え合う同志だった

島根県 東出雲町長
KAWASHIMA HIROAKI **鞍嶋弘明**

すべての教師は例外なく生徒に「勉強しなさい」と言います。「勉強なんてしなくていいよ」などという教師はいません。語る言葉だけを見れば、どの教師も同じです。しかし、40人の生徒を前にしたとき、一握りの生徒しか動かせない教師もいれば、柴田先生のように40人全員を動かせる教師もいる。何が違うのかといえば、それは情熱であり、3年間を見通した緻密な指導力です。生徒はわかっているんですね。人生においてなぜ今勉強しなければならないのか、そこまで考えた上での柴田先生の「勉強せい」の言葉だということを。

一緒に仕事をした4年間で、柴田先生の指導に不満を感じたことは本当に一度もないんです。彼の行動にどんな意図があるのか、私にはそれがよくわかった

導が個人プレーで終わるか、組織として機能し成果を出せるかはまさにそこにかかっています。その部分できちんとした指摘と説明がなされるからこそ、ひとかどの見識も信念も持つ教師がまとまっていく。その過程を体験できたことは貴重でした。

私たちの指導は3年間で終わるのではなく、生徒のその後の人間形成の過程を見通したものでなければならないと当時から意識していました。

彼らがどのようにして進路目標を選択し、実現していくかは、彼らの未来の生き方に大きな影響を与えるからです。そのように考えると、自分のクラスさえ良ければとか、今年の入試結果さえ良ければという指導は価値を持ちません。更に、地域や時代の中で本校が果たすべき役割を見据えた指導ができなければ、学校そのものが衰退する。**確かな教育力のない地域は栄えない。**そういう大きな視点も、松江北高校で学びました。

当時の松江北高校の進路検討会は、休日も返上して、それも深夜に及ぶ密度の濃いものでした。個々の生徒の課題から各教科の指導法、更に組織の見直しを含めて学校全体をいかに効果的に動かすかまで、時間をかけて熱く意見を交わしていました。そこには「『無理』は教師がするものであり、生徒がすべきものではない」という鞍嶋先生の考えがありました。学力不振や進学実績の低迷などの事態に直面したときに、それを生徒のせいにするようになったら即座に職を辞すべきだという覚悟と信念が私たちの中にも当然のように存在していたと思います。

生徒の可能性を伸ばせるシステムと、それを機能させる人材育成のノウハウを学びながら、自らも悩み、工夫を重ねました。私が求めていた進学指導や学校の在り方が着実に具体化されていく濃密な日々でした。

同校での2年目、私は3年学年主任となった鞍嶋先生の下で、クラス担任を務めました。学校全体を把握して大きな流れをつくりながら、担任の個性を生かして学年を経営する手腕に感動しました。そして翌年、先生は松江北高校を去られました。共に働けたのはわずか2年間でしたが、「鞍嶋先生が灯した明かりを消してはならない」と心に期するものがありました。そして6年後、私が同校で9年目を迎えた2000年度、鞍嶋先生は校長として帰ってこられました。大きな力で支えられ、新たな手応えを感じつつ、同校で最後の2年間を過ごすことができたと思います。

一緒に仕事をさせていただいたのは4年間だけでしたが、担任、学年主任、進路指導部長、そして校長としていかにあるべきか、先生から数多くを学びました。趣味も違うし、プライベートの接点もないけれど、いつでも高校教育の未来について率直に話ができる。大先輩に対して大変失礼とは思いますが、同じ志を持つ同志…そう思っています。

私たちの仕事は、人と人とのぶつかり合いそのものです。そこには本来、たくさんの出会いがあります。ただし、**出会いは志を持っていてこそ、見逃すことなく自分のものにできるのだと思います。**

教師として、目の前の生徒たちと、その後に続く未来の高校生たちを育てていくために、今、自分は何を学び、いかに成長すべきか。後輩の先生方にはそういう志を持っていただきたい。そうすれば自分のまわりに素晴らしい出会いがあることに気がつくはずです。出会いはいくつになっても遅すぎることはありません。教師は1人では何もできないのですから。

ので不満を感じることがなかった。だから、校長として松江北高校に戻ったときも、進路指導部は柴田先生に任せて、私がタッチすることはありませんでした。それよりも、校長としての私の役割は、彼が仕事をしやすい環境をつくることであり、そして、お互い自分のやろうとしていること、考えていることを話し、認め合うことだと思っていました。学校を改革する過程では、ときには今までの常識からは外れた、思い切った動きも必要になります。そんなとき私と柴田先生は、お互いの存在から勇気をもらっていたと思うのです。方法がわからないから相談する、という関係ではありませんでしたよ。率直な言葉でわかり合える、まさに同志でした。

私と柴田先生は、性格も趣味も違います。学校でも、力仕事が得意な私が汗をかいて地ならしをして、緻密な指導力を持った彼が丁寧に種をまき、立派に花を咲かせる…そんな役割分担だったと思います。私にないものを持っている柴田先生だったから、自然にお互いを補い合えたのでしょう。

これまでの学校現場での歩みを振り返ると、輝いた時間には、いつも柴田先生がいるのです。

※プロフィールは取材時（08年3月）のものです

SPECIAL ISSUE

特集 「自立する高校生」をどう育てるのか

実態編

学生満足度調査からわかる自立の現状

「挑戦しようとしない」「自信がない」「周囲を気にする」……。そうした今の高校生の実態に悩む先生方の声をよく聞く。そうした現場の課題を取り上げ、今号と次号9月号の2号連続で「自立する高校生」に関する特集を組む。今号は「実態編」として、「学生満足度調査」（ベネッセ教育研究開発センター）などを基に今の高校生、大学生の「自立」の実態を明らかにすると共に、「自立する高校生」を育てるための視点を提案する。

OVERHEAD VIEW

高校生・大学生の「自立」の実態を整理し、生徒を「自立」に向かわせるための視点を考える

視点1 高校生の自立を阻害する要因

本気で頑張った経験が少ない

保護者が子どもに関与する度合いが強まる

教師の多忙化で「待つ指導」がしにくい

【関連記事は、P.14「編集部より」】

視点2 高校生・大学生の自立の実態

高校現場の声による高校生の実態

◎「授業についていくこと」自体が目標になってしまっている
◎模試の自己採点が悪いと翌日休む。それを許す保護者
◎予習をしないためか、質問のレベルが下がった
◎「頑張る」ことがかっこよくないと思っている

【関連記事は、P.6「高校現場より」】

学生満足度調査などから見る高校生・大学生の自立の実態

◎他者や社会に働きかける力に課題
◎挑戦しようとする意欲が低い
◎私的価値を重視する傾向が強い
◎学歴による「シグナリング効果」を追求する傾向にある
◎目標を見いだせていない

【関連記事は、P.8「調査分析」】

視点3 生徒が自立に向かうために学校がすべきこと

「手を離すために手をかける」指導

生徒の「自立の瞬間」を捉えて、教師の言葉で評価する

生徒が「悩んだり、葛藤したりすること」を重視した指導

【関連記事は、P.14「編集部より」】

次号 9月号特集 「自立する高校生」をどう育てるのか 実践編

高校現場より

自立できない 自立したがらない 今の生徒たち

日々、生徒と接する教師は、生徒の自立についてどのように捉えているのか。現場の先生方から頂いた声をまとめた。

「授業についていくこと」自体が目標になってしまっている

福島県A高校

生徒を表すエピソードとしてよく見られたのは、失敗・挫折をしたときに生徒が立ち直れなくなったという内容だ。そうした生徒の姿は**「少子化の中の幸せすぎる子どもたち」**と表現した福島県A高校の先生の言葉に集約されると思う。

「今年、一つの科目のつまずきから、すべての教科の意欲が低下していった生徒を見ました。また、中学時代まで優秀で『できない』という経験をしていないので、**ちょっとできないことがあると激しく落ち込む**生徒をよく見かけるようになりました。

進学校の場合、難しい高校受験を乗り越えた達成感から、生徒は入学後には目的を失いがちです。ところが授業についていこうと努力はしているので、その問題が表に出てこない。生徒は素直ですから、『授業や進路指導についていくこと』自体が目標になってしまっているのです。

成績が順調に推移しているうちはそれでもよいのですが、定期考査や模試で失敗したときが大変です。優秀な生徒ほど失敗した経験がほとんどありませんから、どう対処してよいのかわからず、パニックに陥ります。現状に耐え切れず逃避したいという気持ちになり、直感的に大学受験や就職戦線への参加を避けようとする心理が働くようです」

生徒の挫折経験に対して、保護者の対応の問題点を指摘する声もあった。長崎県立B高校での話である。

模試の自己採点が悪いと翌日休む。それを許す保護者

長崎県立B高校

「自分に自信を持てない生徒が多くなりました。**簡単に泣き出す生徒が増えましたし、日頃、強気の発言をしている生徒ほどちょっとしたことでつまずきます**。驚いたのは、模試の自己採点が悪いと、翌日休んでしまう生徒です。それを保護者が許してしまう。明らかに保護者が協力して生徒を休ませているケースもあります。

こうした生徒がよく見られるようになったのは、やはりつまずきの経験が不足しているからではないでしょうか。保護者や塾から保護されてきた生徒は、ちょっとしたつまずきでも心に大きな傷を受けてしまう。それ以上に子離れできない保護者、むしろ子離れしようとしない保護者の影響は非常に大きいと思います」

授業だけでなく、何事も他人に頼るという傾向が強まっていることに

質問のレベルが下がった

神奈川県立C高校

は、神奈川県立C高校の先生も懸念を示す。

「日常生活でも学校行事でも、**まずは自分で考えてみるという姿勢・態度が希薄になりました**。良くも悪くも教師頼みで、非常に手間がかかります。

私は英語科担当ですが、事前に辞書で下調べをしてくる生徒はほとんどいなくなりました。予習してくる生徒は授業後に決まって良い質問をしてきたものですが、今は授業で初めて学ぶためか質問のレベルが低い。部活動には意欲的ですが、自分で考え工夫して練習するというより、指示に従って動く傾向が見られます。

行事では、ほかの人と協力して何かをしようという雰囲気が希薄です。**個別に担任に言うことはあっても、自分たちで話し合って解決しようとはしません**。だれかがリーダーシップを取ろうとしても、それに協力しようという感じがなく、クラス全体で何か一つのことをなし遂げるのが非常に困難になっています」

生徒の安全志向については、滋賀県立D高校の先生から、生徒のいわゆる「KY（空気を読めない）」を気にする気質も影響しているのではないかという指摘があった。

「髪を振り乱して『がむしゃらに頑張る』ことより、マイペースで無理をせず『それなりに頑張る』ことで、精神的に安定した受験生活を送ろうとしているように見えます。一人暮らしを夢見ることもなく、自宅通学を希望する生徒が増えています。いずれも、安全・安定志向の気質の典型として挙げることができます。

自分の思いをある程度殺してでもまわりの空気を読んで協調性を重視する『KY』に敏感な気質を考えると、**『何が何でも上を目指すという自分の態度はかっこよくないのでは?』と無意識のうちに自問自答してしまっているのではないでしょうか**」

今のこうした生徒に、先生方はどのように対応していこうと考えているのだろうか。福井県立E高校の先生は、授業や学校行事などを小・中学校のように多面的に研究し、それを指導に反映させることで、生徒の意識を変えられるのではないかと話す。

「**世間で言われるほど生徒の意欲が低下しているとは思いません**。ただ、生徒の意識が変化していることは確かです。内容に興味が持てなかったり、教師に人間的な魅力や面白さを感じなかったりすると、授業にも教師にもついてこなくなりました。

部活動やホームルーム、生徒会活動で生徒が生き生きしているのはなぜでしょう。生徒が主役になって、自分が主体的に活動しているという自覚を持っているからだと思います。これまでのように、『ここは入試に出る』『試験に出す』と言っても、関心のない生徒には何の効果もありません。

小・中学校では、授業で生徒が主役となれる場面の設定や、教材の切り口について盛んに研究されているようですが、高校ではそうした研究はほとんどしていないのではないでしょうか。授業だけでなく、部活動や学校行事においても生徒の意識を変えられるように、教師自身が今までの方法にこだわらず、新しい視点で生徒を支援する体制をつくっていく必要があると思います」

生徒の変化から、指導方法、そして教師の意識の変化も求められていることがうかがえる。

「頑張る」ことがかっこよくない

滋賀県立D高校

調査分析

ベネッセ教育研究開発センター「学生満足度調査」より

高校生・大学生の自立度

分析◎ベネッセ教育研究開発センター特別顧問　髙田正規

生徒が自立しにくい傾向は、調査データにどのように表れているのだろうか。2007年にベネッセ教育研究開発センターが実施した「学生満足度調査」などのデータを通して、高校生・大学生の「自立」について考える。

◎調査概要　「学生満足度調査」
◎調査主体　Benesse教育研究開発センター
◎調査対象　主にゼミレポーター※を中心とする2～4学年に在籍する大学生、大学院生（10,779人）
※ゼミレポーター：（株）ベネッセコーポレーションの通信教育講座（進研ゼミ高校講座）を修了後、進学した大学の情報をレポートしてくれている学生
◎調査期間　2007年6～10月

■分析ポイント

調査結果の中から、最近の高校生・大学生の価値観や行動特性をよく表していると思われる六つのデータを取り上げて分析した。その結果、彼らの特徴は、次の五つに集約された。

①他者や社会に働きかける力に課題
②挑戦しようとする意欲が低い
③私的価値を重視する傾向が強い
④学歴による「シグナリング効果」（学歴が人物評価の手がかりとなること）を追求する傾向にある
⑤目標を見いだせていない

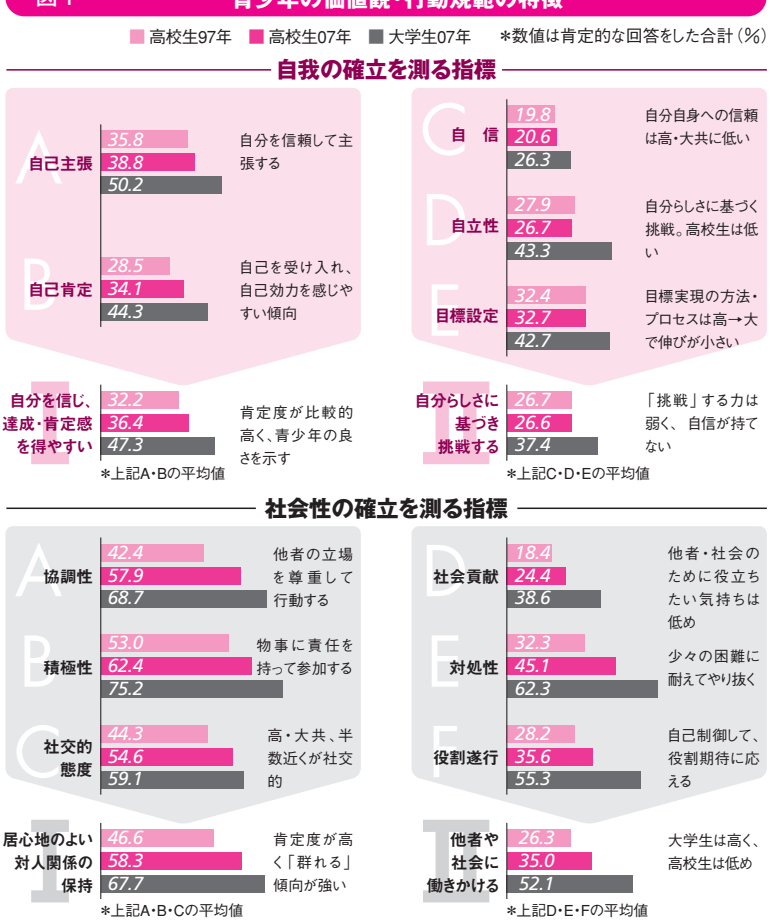
六つのデータを詳しく分析しながら、なぜこれらの特徴が見られるのかを考察していく。

■高校・大学生の価値観と行動規範
他者に働きかける力や挑戦する力に課題

図1は、高校生と大学生の価値観・行動規範の特徴を示したデータである。

自我の確立を測る指標のうち、「A自己主張」「B自己肯定」の肯定度の数値に比べて、「C自信」「D自立性」「E目標設定」の肯定度の数値は相対的に低い結果となっている。特に、「C自信」は高校生より大学生になると数値が若干伸びるものの、数値の低さが目立つ。自信を持っているのは、大学生になっても4人に1人

図1　青少年の価値観・行動規範の特徴



＊カテゴリの代表値は2～5項目の相加平均による値。　＊高校生のデータは、Benesse教育研究開発センター「高校生の自己理解と進路展望」（97年）、「確かな学力の育成をめぐる課題と展望」（08年5月刊）による

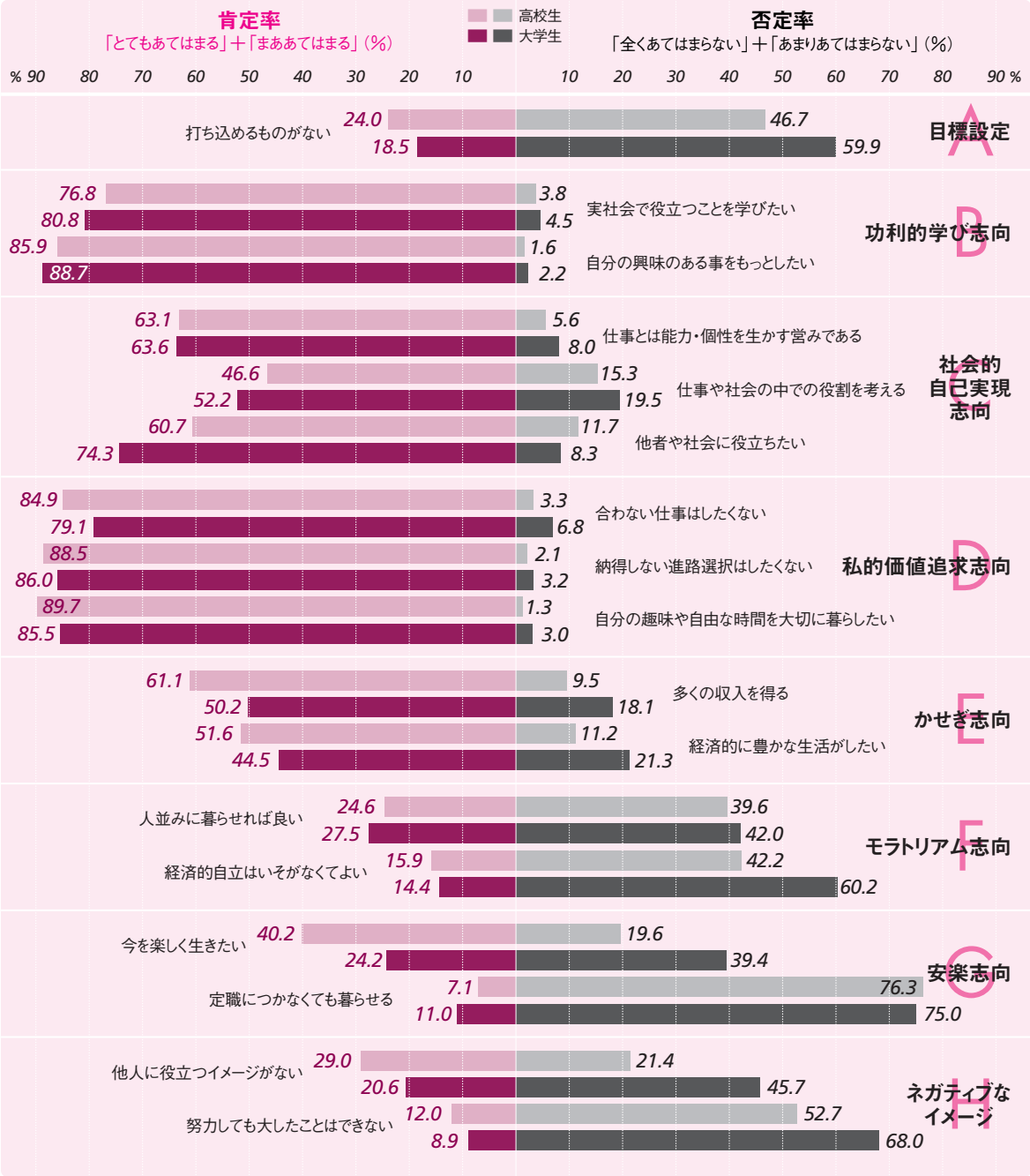
しかいないという計算だ。自分自身を信じ、達成感や肯定感を得やすい傾向は大学生の方が高くなるが、「自分らしさに基づいて物事に挑戦する力が弱い」という特徴がうかがえる。

一方、社会性の確立を測る指標のうち、「A協調性」「B積極性」「C社交的態度」は相対的に高い数値を示しているが、「D社会貢献」「E対処性」「F役割遂行」といった他者や社会に働きかける力の肯定度が特に高校生で低い。

これらの結果から考えると、今の高校生・大学生は、居心地のよい対人関係を築くことは上手だが、他者や社会に働きかける力は弱いといえそうだ。近年、自立できない高校生が増えている一因は、ここにあるのではないだろうか。人間は対人関係の中で生き、生かされている存在である。ところが今の子どもは、他者と接する場面が少なく、人から学んだり人を敬ったりしたという体験に乏しい。

こうした状況は、自分に自信を持てない高校生・大学生が増えている

図2 高校生と大学生のキャリア観



＊高校生のデータは、Benesse教育研究開発センター「確かな学力の育成をめぐる課題と展望」（08年5月刊）により作図

という前掲のデータとも無関係ではない。達成感や自己肯定感が低いのは、他人に認めてもらった経験が乏しいことの表れでもある。「他者に認められたい」という欲求は、人間の根源的な欲求の一つだ。しかし、人に認めてもらうには、他者に対して働きかけなくてはならない。働きかける力が弱いために、まわりの人から認められているとは思えず、悶々（もんもん）としている高校生・大学生が多いのではないか。

■高校・大学生のキャリア観
私的価値を重視する傾向は社会との関係を閉ざすことに

「今の青少年は私的な価値の追求を重視している」とよくいわれる。学習後に得られるものがなければ、あるいは得られるものが見えなければ、学習に向かわない傾向が強い。この功利的な価値観も、自立の問題と無関係ではない。

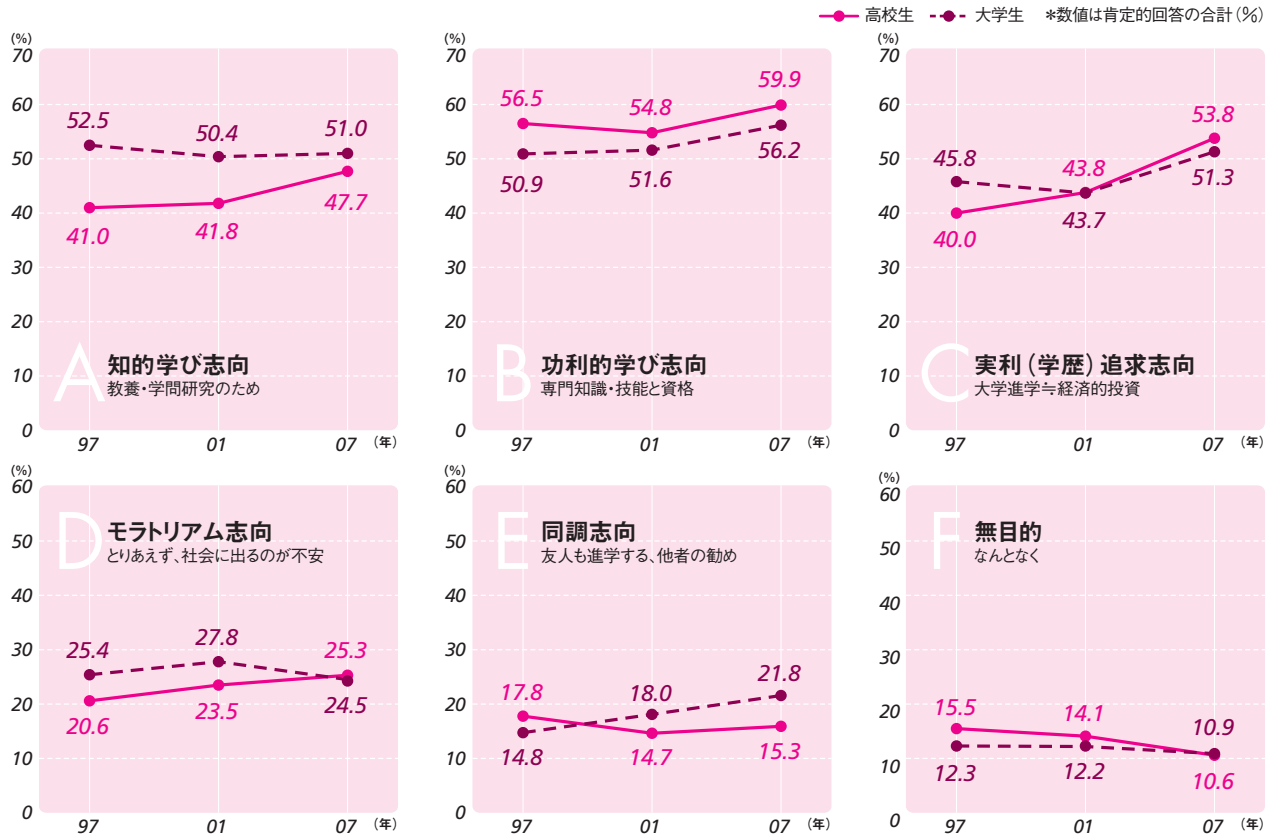
P.9の図2は、高校生・大学生のキャリア観を示したデータである。「B功利的学び志向」の肯定率は高校生・大学生共に高く、学びに積極的な姿勢が見える。ところが、「D私的価値追求志向」の肯定率も同様に高く、「功利的な価値観」が強く働いていることを端的に表している。

つまり、Bの「実社会で役立つ学び」「興味ある事の学び」については、私的価値追求の側面から選んでいると考えられる。自分の好みだけを行動の価値基準とすることは、他者や社会との関係を狭め、自立に通じる道を自ら閉ざしているともいえよう。

フランスの詩人ポール・ヴァレリーは次のように言っている。「人は他者と意思の伝達が図れる限りにおいてしか、自分自身とも通じ合うことができない」。他者との関係を上手に築けない人は、自分自身への問いかけもうまくいかないということだ。

学習に向かうためには、「やればできる」という自信が必要である。しかし、自分としか通じ合えない子どもは、「小さな繭（まゆ）」の中で自分探しをしてしまうために、すぐに壁にぶつかり「できない自分」にたどり着く。いったん否定的な自己イメージが形成されてしまうと、自律的に学びに向かいにくくなるといえる。

図3　進学動機の変化



＊高校生のデータは、Benesse教育研究開発センター「高校生の自己理解と進路展望」（98年刊）、「高校生の自己概念と学習行動」（02年）、「確かな学力の育成をめぐる課題と展望」（08年5月刊）、大学生のデータはBenesse教育研究開発センター「学生満足度と大学教育の問題点」（97年、01年、07年）により作図

■高校・大学生の進学動機 将来の安定を求めるために「シグナリング効果」を追求

高校生・大学生の志向性の変化は、進学動機にどのような影響を与えているのだろうか。**図3**は進学動機の経年変化を示したデータである。この10年で最も伸びているのは、「C実利（学歴）追求志向」だ。どれだけ一生懸命に勉強したのかという内実より、目に見えるものに価値を求め、私的価値を重視する青少年が増えているということを示している。

高校生・大学生が求めるのは、安定した将来なのだが、それを内実とはかけ離れた「○○大卒」や「△△資格取得」などの肩書きに求め、その「シグナリング効果」（P.8の「分析ポイント」参照）でよい就職先に恵まれると考えている。

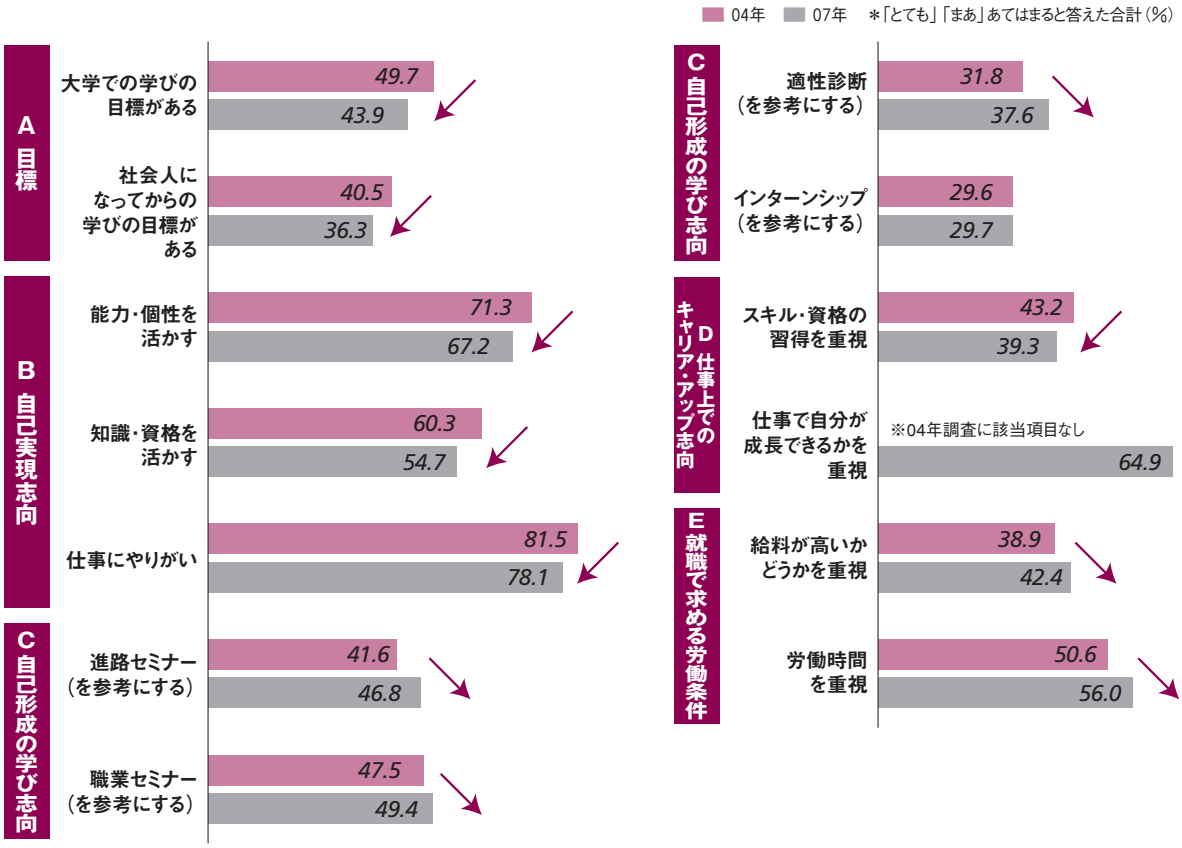
ところが、企業が求める人材像を考えればわかる通り、学歴や資格だけが採用の決め手になるわけではない。大学卒という学歴を手に入れたから大丈夫と信じている学生ほど、就職活動のプロセスで先行きが見えなくなり、そのギャップに苦しむことになる。こうした学生の多くは、理想の就職先に恵まれなかった場合、次の目標が見つからずに、立ちすくんでしまう可能性が強い。

■キャリア形成に対する意識 目標を見いだせない学生が増え キャリア教育の需要が高まる

大学生は学びの目標をどのように見いだしていくのか。**図4**は大学入学後のキャリア形成にかかわる意識と行動について示したデータである。

「A目標」を04年と07年とで比較すると、07年の結果は2項目の平均で5ポイント程度下がっている。学びの目標を見いだせない学生が増えていることがわかる。その一方、「C自己形成の学び志向」は増加傾向にある。特に「適性診断」を参考にする学生は約6ポイントも伸びている。これらの結果は一体何を示しているのか。

図4 キャリア形成にかかわる意識と行動



＊数値はすべて大学生。データは、Benesse教育研究開発センター「学生満足度と大学教育の問題点」（04年、07年版）により作図

自分が何に向いているのかわからなければ、目標設定はできない。その目標にたどり着くためには、到達するための方法と段取りが必要だ。

そこに気づいた学生の行き着いた先が、進路セミナーあるいは適性診断だったということなのではないだろうか。自分が何者かを知り、将来の目標を見いだそうと模索する学生の姿を映し出しているといえよう。

■授業と生徒の適合度
進学校では成績下位層にも適切な授業ができている

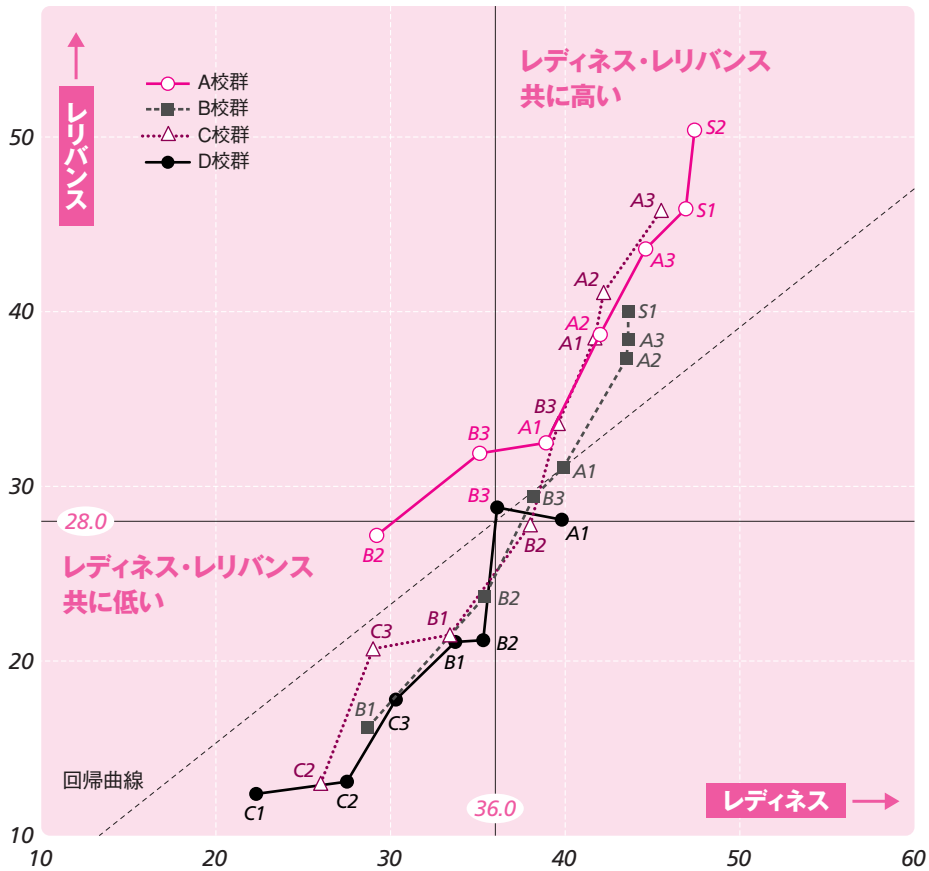
最後に、今後の指導を考える上で重要な視点を示唆しているデータ二つを紹介する。一つめは、指導の中心となる授業についてである。

高校生にとって、授業は適切なものになっているのだろうか。それを測る上で参考になるのが、「レリバンス（教師による授業の適切性）」と「レディネス（生徒による授業への準備状態）」だ。「レリバンス」は教師や授業に対する高校生の満足度を、「レディネス」は生徒自身の授業に対する態度や行動に見られる参加度を示す指標だ。

図には示していないが、レリバンスとレディネスの関係を学力層別に見ると、学力の高低にかかわらず、ほぼ一貫して「レディネス」が「レリバンス」を上回っている。成績下位層ほどその開きは大きいが、上位層になるにつれてその差は縮まり、最上位のS2レベルではレリバンスがレディネスを上回る。学力レベルの高い生徒は、自分のレディネス以上に、授業に適切性を感じているということになる。

更に興味深いのは、図5に示した学校群との学力到達レベル別に見た高校生の授業に対するレリバンスとレディネスの関係である。A校群のデータに注目すると、B2・B3の学力層の生徒が回帰曲線より上に位置している。つまり、A校群では成績下位層の生徒に対しても、その学力に合った指導ができていることを示している。このため、A校群では成績下位の生徒が上位に食い込む現象がしばしば起こる。そうした生徒に刺激されて、成績上位層も相対的に伸びていくメカニズムが働いて

図5　授業に対するレリバンス（適切性）とレディネス（準備状態）の関係（回帰分析）



グラフが回帰曲線より上にある場合は、レディネス＜レリバンスで、授業への満足度が高いことを表す。一方、グラフが回帰曲線より下にある場合は、レディネス＞レリバンスとなり、授業への満足度が低いことを表す

※C1～S2（学力到達度の区分）は、進研模試による偏差値を表示。
C1…33未満
C2…33～38未満
C3…38～43未満
B1…43～48未満
B2…48～53未満
B3…53～58未満
A1…58～63未満
A2…63～68未満
A3…68～73未満
S1…73～78未満
S2…78以上

※A校群～D校群については以下の条件で全国より抽出
A校群：進研模試偏差値58以上の生徒が80％以上の学校
B校群：進研模試偏差値58以上の生徒が50％以上80％未満の学校
C校群：進研模試偏差値58以上の生徒が30％以上50％未満の学校
D校群：進研模試偏差値58以上の生徒が5％未満の学校

＊Benesse教育研究開発センター「確かな学力の育成をめぐる課題と展望」（08年5月刊）。有効回答数は、A校群3,131人、B校群1,264人、C校群2,004人、D校群2,248人（すべて高校2年生）

いるといえるだろう。

やる気はその人の属性ではなく、その人の置かれている状況、すなわち学校文化や学校力との相互関係の中で生まれるものであり、そのために多様な視点で動機付けを考える必要があるといえよう。

■企業の求める人材像と学生の意識
計画力の育成が大学以降の学びにも役立つ

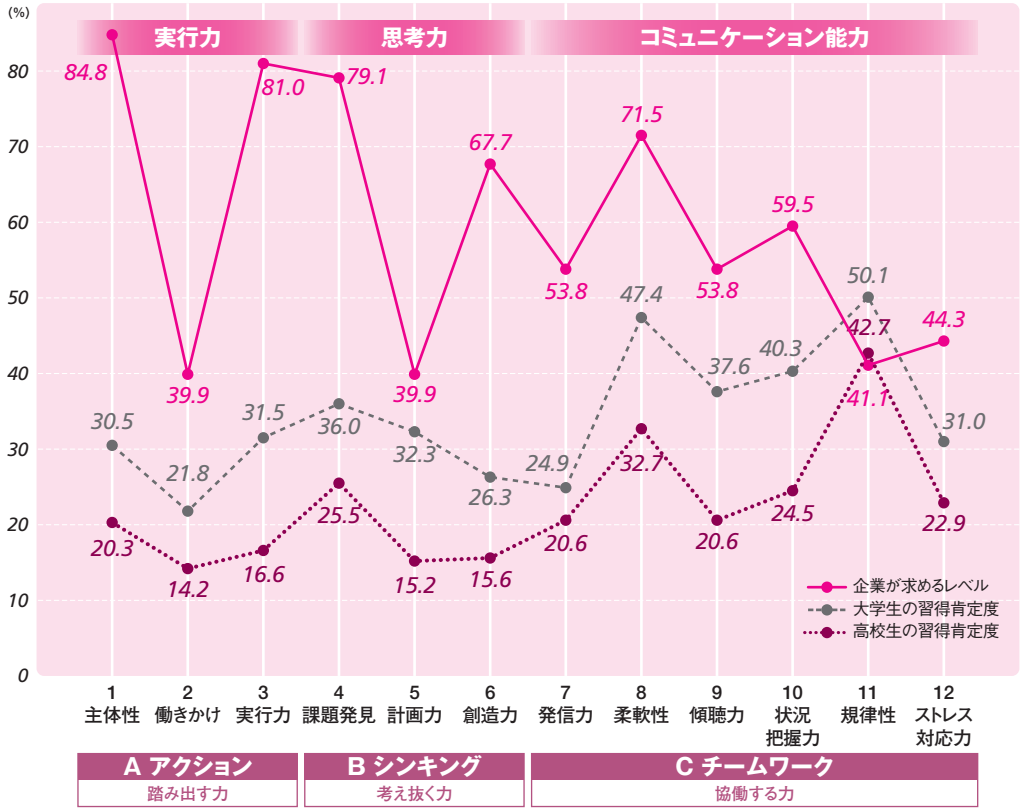
二つめは、企業が求める力と、それらに対する高校生・大学生の習得肯定度についてのデータである。

図6は、企業が求める社会人基礎力（**注**）のレベルと、大学生および高校生の習得肯定度を示したデータである。大学生の習得肯定度と企業の要求レベルとの乖離（かいり）が見られるのが、「主体性」「実行力」「課題発見」「創造力」「発信力」である。これらは、社会人となる前に高校や大学において身につけておくべき資質・能力といえる。一方、高校生と大学生の肯定度の比較では、「主体性」「実行力」「計画力」などが比較的乖離している。

「主体性（自立性）」「実行力」は高校と大学両方で伸ばしていくべき力だが、「計画力」は高校段階で身につけておくことが望ましい。なぜなら、目標を達成するためには、方法と段取り、すなわち計画力が必要であり、それは大学入学後の学習や研究活動をする上で欠かせない力だからだ。

図示はしていないが、大学入試センターが示した「能力・資質」要件の側面から社会における業務遂行上の必要度と大学生の肯定度を比べたデータによると、最も乖離が大きかったのが「言語（自己）表現力」と「文章表現力」、いわゆる「表現力」であった。表現とは、身につけた知識やスキルを活用できて初めて成り立つものである。新学習指導要領で強調されている「活用する力」は、こうした社会のニーズを踏まえたものでもあることを、高校現場においても認識しておく必要があるだろう。

図6　企業が求める社会人基礎力



＊企業のデータは、経済産業省「社会人基礎力に関する緊急調査」（06年4月）により作図（有効回答数・企業320、大学生3,127人）。高校生のデータは、Benesse教育研究開発センター「確かな学力の育成をめぐる課題と展望」（08年5月刊）により作図。大学生のデータは、経済産業省「社会人基礎力に関する緊急調査」と、Benesse教育研究開発センター「学生満足度調査」07年版双方の平均値を表示

注　「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」といった、職場や地域社会で働く上で必要な力のことを指す。
経済産業省の「社会人基礎力研究会」が定義し、提唱している

編集部より

高校生が自立に向かうために必要な視点

高校現場の声と調査データから高校生・大学生の「自立」の実態を見てきた。ここでは、高校生が自立しにくい要因を整理した上で、高校段階でどのような指導をすればよいのかを考える。

生徒の自立を阻害する要因

環境の変化は、生徒の意識を確実に変えている。大学入試、親子関係、教師の指導の観点から、生徒の自立を阻む要因をまとめた。

要因1 本気で頑張った経験が少ない

大学入試の競争が緩和された結果、生徒は、無理をしなくても難関大に合格できてしまう場合がある。生徒はより高い目標に向かって挑戦するより、「そこそこでよい」という意識が強いのではないか。そのため、生徒は一つのことを本気で成し遂げ、その中から「達成感」を得る経験が乏しいとも考えられる。

要因2 保護者が子どもに関与する度合いが強まる

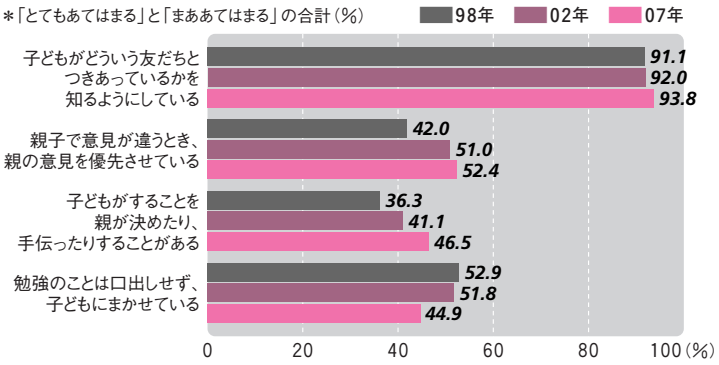
ベネッセ教育研究開発センターが実施した「第3回子育て生活基本調査」で、中学生を持つ保護者に家庭の教育方針について尋ねたところ、近年「勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている」の肯定率は減り、「親子で意見が違うとき、親の意見を優先させている」の肯定率が増加している（図）。子どもの教育に対し保護者が関与する度合いが強まっている様子がうかがえる。

要因3 教師の多忙化で「待つ指導」がしにくい

学校週五日制などによって、教師が多忙化している中、時間をかけて生徒がじっくり考える力を身につけることに価値を置いた「待つ指導」が軽視されている可能性もある。

学習法や時間の使い方など、本来生徒が創意工夫を凝らしていくべきことに関しても、教師が先回りをしてあれこれと指示をしてしまうなど、生徒が自立に向かいにくい状況を教師の側がつくっているのかもしれない。

図 家庭の教育方針



＊中学1～3年生を持つ保護者　出典：Benesse教育研究開発センター「第3回子育て生活基本調査」

【次号に向けて】生徒が自立に向かうために学校がすべきこと

生徒が自立しにくい状況の中で、高校現場では、どのような視点で自立を捉え、指導をしていけばよいのか。次号（9月号特集・実践編）に向けて、その視点を挙げた。

ポイント1 「手を離すために手をかける」指導

大学進学の実績を出すためには、「強制」してでも学習に向かわせる指導が必要になる。特に、自ら進んで行動をする生徒が少ない現状を踏まえると、「手を離すために手をかける」という指導の考え方が必要なのかもしれない。

生徒が今すべきことにしっかり取り組むということに価値を置いた指導を積み重ねることで、生徒は日々直面する課題を解決していく力を身につけていく。学校全体でこうした自立に対する考え方を理解し、目標を共有した上で取り組めば、生徒の表層的な「よい動き」を促す指導から、生徒にさまざまな経験をさせ、生徒自身に考えさせる「待つ指導」を徐々に増やしていくことができるのではないか。

ポイント2 生徒の「自立の瞬間」を捉えて、教師の言葉で評価する

生徒は教師の言葉で育つ。生徒の何気ない言動の中にある「自立の瞬間」を捉えて、教師が言葉にして生徒に伝えることが、生徒の自立を促進する上で重要だ。

「生徒の自立の瞬間」は日常の中にたくさんある。例えば、今まであまり質問をしなかった生徒が職員室へ質問をしにきたり、奨学金の説明会に行った生徒が学習の記録に親への感謝の気持ちを書いていたり、といった何気ない行動だ。

生徒のこうした言動を見逃さず、その言動が生徒の確かな自立に基づいたものであることを褒める。こうした教師の「言葉」による評価の繰り返しが、生徒を自立に向かわせるのではないか。

ポイント3 生徒が「悩んだり、葛藤したりすること」を重視した指導

進路、学校行事、部活動など、どのような活動の目標であれ、その達成に向けて課題に悩んだり葛藤したりするからこそ、生徒に創意工夫が生まれ、主体的に考えるようになる。「○か×か」という一つの正解を効率よく導き出す方法の習得に重点が置かれすぎていないか、という大局的な観点で日常の指導を見直してみる余地がある。

生徒に葛藤させる場面は、日常の授業の中でも工夫すればつくることができる。知識の伝達を目的とした効率的な指導だけではなく、例えば、グループ学習をしたり、ディスカッション形式を授業に取り入れたりするなど、生徒が中心となって考える場を工夫することで生徒の思考プロセスに揺さぶりをかけることができるのではないだろうか。

多忙であり、教員数の制約なども ある中で、生徒の自立をどう実現させるかということは高校現場の共通した課題であろう。ただし、自立を促す指導は、学校によって生徒の様子が違うため、その指導内容も異なるのは当然といえる。

次号（9月号）では、高校現場で生徒を自立に向かわせるために具体的にどのような指導が行われているのかを紹介する。

ウェブサイトでご意見募集します

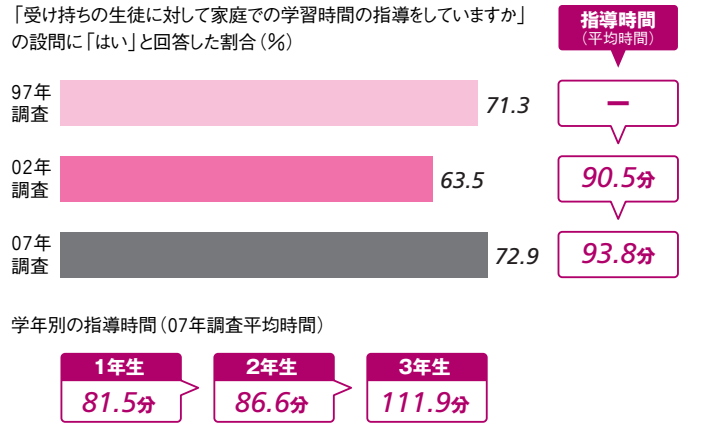
◎9月号に向け、「自立する高校生」を育てるためにすべきことについてのご意見を募集します。是非ご協力ください。

▶www.benesse.jp/berd

5年前と比べ、中学校での家庭学習指導や宿題の頻度は増加

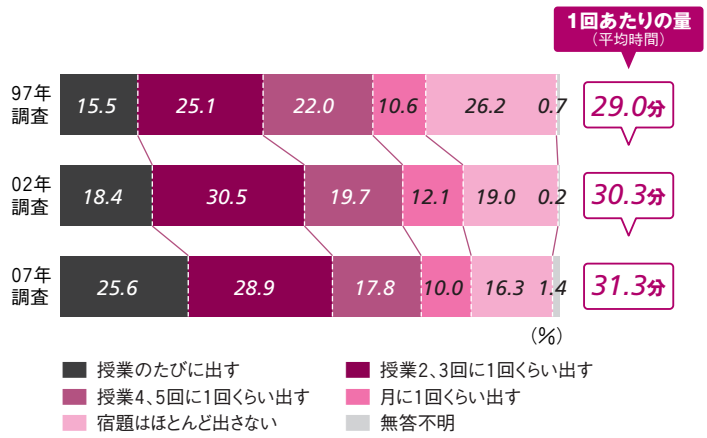
Benesse教育研究開発センター「第４回学習指導基本調査」より

図１ 家庭学習指導の有無と指導時間



＊「指導時間（平均時間）」は、「家庭での学習時間の指導をしていますか」の設問で「はい」と回答した人のみを対象に算出。「15分」を15分、「3時間」を180分、「それ以上」を210分のように置き換えて、無答不明を除いて算出した。なお、97年調査は時間の選択肢の形式が異なるため分析から除外した

図２ 宿題を出す頻度と１回あたりの量



＊「1回あたりの量（平均時間）」は、宿題を「授業のたびに出す」から「月に1回くらい出す」と回答した人のみを対象に算出。「15分」を15分、「1時間」を60分、「それ以上」を75分のように置き換えて、無答不明を除いて算出した

出典◎『第4回学習指導基本調査』／調査時期◎97年調査：1997年12月～1998年1月、02年調査：2002年9～10月、07年調査：2007年8～9月実施／調査方法◎97年調査：郵送法による質問紙調査（教職員名簿を基にした系統抽出）、02年調査：学校通しによる質問紙調査、07年調査：郵送法による質問紙調査（全国の公立中学校のリストより、都道府県の教員数に応じた抽出確率で無作為に学校を抽出）／調査対象◎公立中学校の教員97年調査1,368名、02年調査：3,388名、07年調査：2,109名。＊国語・社会・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員のみ対象／調査地域◎97年調査：岩手県・新潟県・東京都・岡山県・福岡県・熊本県、02年調査：北海道・岩手県・宮城県・新潟県・石川県・群馬県・東京都・山梨県・愛知県・大阪府・兵庫県・岡山県・福岡県・熊本県、07年調査：全国

宿題も家庭学習指導も共に増加

小誌４月号で、「中学校教師の意識は学力向上重視に変化している」と紹介したが、実際の指導内容にも変化は見られるのだろうか。Benesse教育研究開発センターが行った「第４回学習指導基本調査」の結果を見てみる。

図１は、中学校教師に家庭学習指導の有無を尋ねた結果だ。2007年調査では、家庭学習時間の指導を行っている割合が５年前の調査結果と比べて約10ポイント増加、学習するように指導している時間も約３分増えている。また、学年別の指導時間は、学年が上がるごとに長くなっている。特に３年生では２年生より約25分多い。

図２では、中学校教師が宿題を課している頻度を示している。07年調査では「授業のたびに宿題を出す」という教師が、5年前の調査と比べて約7ポイント増えている。１回あたりの量はさほど増えていないが、宿題の頻度は確実に増えている。

家庭学習に対する生徒の意識の把握を

図１と図２の調査結果から、教師が生徒の家庭学習にかかわる度合いが高まっている様子がうかがえる。こうした現状から推察すると、子どもが家庭で机に向かっている時間自体は増えているかもしれない。しかし、自分から予習や復習をするという意識が低くなっている可能性も考えられる。

高校に入学してくる生徒の中学時代の家庭学習時間を把握するだけではなく、中学校での宿題の頻度はどのくらいか、どのような家庭学習を行っていたのか、生徒の家庭学習に対する考え方や意識なども併せて調べることは、入学時の指導計画を立てる上で重要といえるだろう。

中学校の現状は
http://benesse.jp/berd/
または ベネッセ　研究 で 検索
Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトをご覧ください
→ HOME ＞情報誌ライブラリ（中学校向け）

三重県立 **川越高校**

自立した学習者を育てる

「熱き思いを継承しながらも
今の生徒を育てる次代の学校を創っていきます」

▶▶▶ P.18

指導変革の軌跡

そのとき教師は、そして生徒は
どう変わったか

長崎県立 **猶興館高校**（ゆうこうかん）

推薦入試対策指導の確立

「面談指導を教師全員の分担制にしてから
職員室の雰囲気ががらりと変わりました」

▶▶▶ P.22

神奈川県立 **菅高校**（すげ）

組織的な生徒指導による学校改革

「無理だと思わずに、まず試してみる。失敗したら
別の方法を考えればよいのです」

▶▶▶ P.26

三重県立
川越高校

自立した学習者を育てる

「受験は団体戦」を不易の目標とし生徒の変化に応じた指導の再構築を目指す

◎国際的な視野に立ち、自主的創造的な精神を身につけた「自立した学習者」（Independent Learner）の育成を目指す。帰国生徒の受け入れ、海外語学研修、中学生スピーチコンテストなど、国際理解教育に力を入れる。2002年度から3年間、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（SELHi）の指定校。

設立
1986（昭和61）年

形態
全日制／普通科・英語科／共学

生徒数
1学年約320名

08年度進路実績
国公立大は、筑波大、横浜国立大、金沢大、名古屋大、名古屋工業大、三重大、大阪大、愛知県立大、名古屋市立大など86名が合格。私立大には、青山学院大、上智大、法政大、明治大、早稲田大、南山大、同志社大、立命館大、関西学院大など、延べ699名が合格。

住所
〒510-8566 三重郡川越町大字豊田2302-1

電話
059-364-5800

Web Site
http://www.mie-c.ed.jp/hkawag/

実践のポイント

1 「生活確認表」で生徒の生活実態を把握し指導に生かす

2 「総合的な学習の時間」の活動を参加型・発信型にシフト

3 2、3年次に年2回、短期集中の自主学習期間を設け、主体的な学習に結び付ける

「手をかける指導」から自立した学習者の育成へ

三重県立川越高校は、1986年の創立以来、「受験は団体戦」を旗印に、集団指導体制で「過保護なまでに生徒とかかわる指導」を身上としてきた。生徒が朝から夜まで黙々と廊下で自習に取り組む「廊下学習」、夜遅くまで生徒の個別質問に対応する「くっつき学習」、きめ細かい進路ガイダンスや質量共に充実した面談。生徒個人に合わせた「オーダーメイド」ともいえる指導で進学実績を伸ばしてきた。

そうした同校も、創立から十数年を経た00年前後から、徹底的にかかわるだけでは生徒の伸びに限界があると感じるようになった。新学習指導要領への移行、学校週五日制の導入など教育環境が大きく変わろうとしていた時期でもあった。そうした変化に対応しようと、02年度のSELH-i指定を機に「自立した学習者を育てる」を新たなSI（スクール・アイデンティティ）として取り組みを見直した。

3年間の進路指導を「進路指導プロジェクト」として体系化し、取り組みのねらいと方法を明確化。発達段階に応じた動機付けの手法を取り入れ、教師が一方的に教える指導から、学びをサポートするスタイルへの転換を図った。これらの改革の内容と成果については、小誌04年4月号（注1）で紹介し、大きな反響を得た。

注1　バックナンバーはBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）

「進路指導プロジェクト」によって指導のねらいや方法が体系化され、担任の力量や経験の差によるぶれは少なくなった。また、生徒の主体性を引き出す学習指導によって自立的な学習に目覚めた生徒が増え、百数十名の国公立大合格者の約3分の1が後期日程で合格するなど、生徒に粘り強さも見られるようになった。手厚い指導という同校の持ち味を生かしつつ、激変期を乗り越えたのである。

進路指導の体系化が教師の活力を奪う

ところが、こうした成功が逆に「変化に対する柔軟性を失わせた面もある」と、2学年英語科担任の鵜山敦子（うやま）先生は指摘する。

「新任教師でも進路指導プロジェクトの流れに沿って指導すれば、一定の成果を挙げられます。シラバス通りに指導していれば結果が出るという安心感が、外的な変化への対応を遅らせた面があることは否めません」

外的な変化とは、相次ぐ大学改革による後期日程の募集人員の削減である。更に、受け身の生徒が増え、自立的な学びに向かわせることが困難になってきた。次第に、生徒の粘り強さを生かした逆転合格の法則が通用しなくなっていったのである。

「以前は2年生秋の修学旅行が終わると、ほとんどの生徒が自分から受験勉強を始めていました。ところが、今はその時期になっても、教師に頼っていれば何とかなるという意識を捨てきれない生徒が多くいます」と鵜山先生は話す。

1学年主任の山田秀裕先生は、「いくら進路指導が体系化されても、大切なのは実際の指導場面にどのように落とし込んでいけるかです。私自身、ベテラン教師という『生きた手本』がいて、そのスキルを学ぶことで成長してきたと実感しています。そうした教師個々の成長と現場での実践があって初めて、『進路指導プロジェクト』が生きたノウハウになるのです。改革から数年が経ち、次第に前年度の繰り返しとなるだけで、活力が削がれていったのかもしれません」と話す。

三重県立川越高校
森本卓幸 Morimoto Takayuki
教職歴22年。同校に赴任して11年目。進路指導主事。「1日1日を『下真剣』に生きる生徒を育てたい」

三重県立川越高校
山田秀裕 Yamada Hidehiro
教職歴24年。同校に赴任して7年目。1学年主任。「能力に限界はあっても向上心には限界がないということを伝えたい」

三重県立川越高校
鵜山敦子 Uyama Atsuko
教職歴19年。同校に赴任して8年目。2学年英語科担任。「国際社会で活躍できる、骨太で視野の広い生徒を育てていきたい」

「生活確認表」で生徒の生活を把握

変化していく生徒にどのように対応すべきか。同校の模索が始まった。他校を視察し、得られた知見は貪欲に取り入れた。「フットワークの軽さは本校の特徴。従来の取り組みをベースにして、できるところから始めました」と進路指導主事の森本卓幸先生は話す。

生徒の変化に合わせていこうとすると、自然と生徒に手をかける指導になった。その一つが「生活確認表」だ。それまで、生徒の学習状況については「計画」に絞って把握してきた。定期考査や長期休暇の前に特定期間の学習計画を書かせ、その期間が終わると学習時間の実績と自己評価を記入させていた（小誌05年10月号参照）。しかし、山田先生は07年度に3年生の担任を経験し、「計画表のチェックだけでは、生徒の実態はつかめなくなった」と感じた。

「計画表を見る限りきちんと勉強していて、本人も面談で『頑張っている』と話していたのですが、入試では不本意な結果になった生徒が何人もいました。以前は計画表と面談によって個々の生徒の問題意識や悩みを十分につかめましたが、今の生徒は伝える力が弱いためか、実態をつかみにくい。普段の生活にも目を向け、早期に課題を把握する必要性を痛感しました」

そこで、08年2月に1年生を対象として「学

習時間モニター週間」を設けた。夕食時間、学習時間と内容、就寝時間など、帰宅後の生活を「確認表」に記録させるのだ。期間中の1週間は毎日担任がチェックし、コメントを添えて生徒に戻した。すると、学習時間ゼロという生徒が1、2割いるなど、生徒の生活状況が明確に見えてきた。

「『テレビと学習の時間を入れ替えなさい』とアドバイスしたところ、すぐに取り入れた生徒は多くいます。やるべきことを具体的に指示するなど手取り足取り指導していかなければ、学習時間を確保することもおぼつかないという状況でした」（鵜山先生）

学習時間モニター週間は2年生でも4月に1週間実施し、確認表は面談の資料としても活用している。

参加型の総合学習により生徒の積極性を引き出す

「生徒が変わった」と悲観するだけでは、現状打破には結び付かない。同校は、07年度に「総合的な学習の時間」で行っていた進路学習中心のカリキュラムを見直し、ディスカッションや課題解決型学習など生徒参加型キャリア教育にシフトした。

「今の生徒はプレゼンテーションなど発信型の課題に対して抵抗感がなく、上手に行います。生徒参加の取り組みをきっかけに、積極性を引き出せればと考えました」と森本先生は話す。

特に力を入れているのは、課題解決型学習だ（**図1**）。グループごとにテーマを決め、調査、プレゼンテーションを行う。以前の進路学習は、志望大の受験科目や個別学力試験の配点比率など、受験に特化した内容だったが、07年度からはキャリア教育の視点を取り入れ、生徒の自由な発想を大切にするテーマに切り替えた。教師としては、いかに生徒にとって身近で、かつ興味を持つテーマを選ぶかが腕の見せ所だ。例えば、07年度の1年生では、「川越市役所」という架空の職場を設定し、「健康課」の職員として少子高齢化対策を考えさせた。森本先生は「生徒の目を社会に向けて開かせ、進路を考える足がかりにしてもらうことがねらい。今後は、自ら課題を見つけ解決するゼミ形式の個人研究に挑戦させたい」と、展望を述べる。

図1　課題解決型学習の流れ（07年度2年生の例）

ねらい

1.大学で学べることを自分で研究しながら進路選択のポイントをつかみ、将来のために今努力しておくべきことや、今考えておくべきことを認識する。

2.各自が志望分野、学問、学科にかかわる研究テーマを設定し、1年次の調べ学習を更に深化させながら、論理的に考え、発表する技術を身につける。

5月2日（水）

ステップ1　オリエンテーション

1. 希望学部別に1組5人程度のグループをつくる。
4月26日（水）の学部学科ガイダンスのあと、希望学部を第2希望まで出させ、あらかじめ担任でグループ分けをしておく。グループ発表をしたり、最終的にグループでレポートをまとめたりするため、最低でも2人以上の班にする。

2.「月に迷ったゲーム」を行う。

ステップ2　テーマ作り

1. 課題をグループで設定（課題例の中から選ぶ）。

2. KJ法を使って調査すべき要因を発見し、整理する。

3. グループのテーマを決定する。

＜課題例＞
経済学部系「なぜ松坂は60億円で入札され、いきなり年俸10億円なのか?」
工学部系「ハイブリッドカーを買うと、何年でモトがとれるのか?」
生物資源学部系「植物の多くが緑色なのはなぜ?」
法学部系「6か国協議にどうしてアメリカが入っている?」
芸術系「人間はどうして花を美しいと思うのか?」
経済・社会系「バーバリーやディオール等のブランドが実は日本製なのはなぜ?」
医療系「タミフルはほんとうに危ない薬なのか?」

5月9日（水）6・7限目

ステップ3　情報収集

1. 図書文献やインターネットで情報収集し、有効な情報は互いに交換し合う。

5月23日（水）7限目

ステップ4　レポート作成・グループ発表準備

1. レポート構成法、レポートの作り方などについても学ぶ。

5月30日（水）7限目

ステップ5　グループ発表　＊後日、クラス発表

1. 発表の心得を学び、グループ内で発表する。

2. 相互評価する。

3. グループでレポートをまとめる。

「かがやき―学習強化チーム」で主体的な学びに結び付ける

新しい取り組みを取り入れながら、同校の不易である「受験は団体戦」はもちろん継続している。代表的な取り組みは、小誌05年10月号でも取り上げた「かがやき―学習強化チーム」だ。3年生は夏休み直前と12月、2年生は夏休みと春休みの2回、それぞれ1週間～10日間かけて

行う校内自学自習である。

期間が決まっているだけで、参加は自由。学習時間も内容もすべて生徒に任される。下校時刻になると、生徒は「学習実績表」にその日に取り組んだ教科と内容、時間を記入し、「今日の収穫」として感想を書く。教師は毎日集めて、アドバイスやコメントをつけて返す。「ビフォー・アフター」として、実施前には参加目標、終了後には感想を書かせる（**図2**）。07年度の3年生は200名以上が参加した。

『友だちに負けられないと頑張った』など、まわりの雰囲気に刺激されて良い意味でのライバル意識が芽生えています。『ビフォー・アフター』を読むと、短期間ながら生徒が学習への意欲を高めていくことに驚かされますし、何よりも私たちが触発されます」と山田先生は話す。

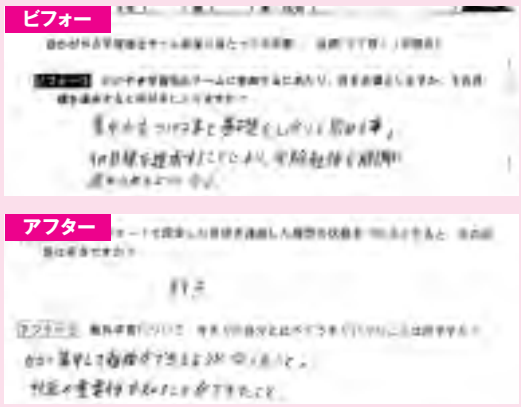
より生徒に手をかける指導で、新たな一歩を踏み出しつつある川越高校。今後は、父性的な指導と母性的な指導の両面から生徒を支えていく学校づくりを目指すという。

「母性は本校の強みである手厚い進路指導です。今後は面談にキャリアカウンセリングの手法を取り入れ、志望校選びの前段として、『どう生きていくのか』『なぜ大学か』という将来設計の視点を取り入れて指導していきたいと考えています。私たちも今まで以上に面談力を高めていく必要があるでしょう」

父性の面では、スクールミッションである「感・知・動を磨く」の実践の中で、生徒のモラルバックボーンを培っていく。同校では、3月に卒業生と保護者が雑巾でトイレを磨く「心を磨く大掃除」を行っている。生徒と教師、保護者が共に凡事を徹底することで、生徒一人ひとりに「社会人」としての自覚を促すことがねらいだ。

「本校は創立20年を過ぎ、人間でいえば青年期に入りました。青年期の子どもが『何のために生きるのか』『自分はどこから来てどこへ行くのか』という問いを抱くように、本校は『これからどこへ向かうのか』を全力で悩んでいる時期といえるでしょう。それは、古い自我を壊し、新しい自我を再構築する過程にほかなりません。今こそ『進路指導プロジェクト』ができ上がるまでの熱い思いを継承し、次代の川越高校の進むべき道を見いだしていきたいと思っています」（森本先生）

図2　「ビフォー・アフター」の記入例



ビフォーには、目標、強化・克服したい教科・分野、学習方法などを書き込み、アフターでは、うまくできたこと、できなかったこと、改善策の自己評価をする

変革の明日を目指して

生徒の変化に即応できる振り返りが必要

2学年英語科担任　**鵜山敦子**

◎ここ数年の本校に欠けていたのは、変化に対する柔軟性だったと思います。今の2年生は、以前に比べて成績下位層が1クラス分増え、自立の時期が遅くなっているという印象があります。2年生なら自分で1か月単位の学習計画を立て、自ら軌道修正できなければならないと思うのですが、今の生徒は「生活確認表」を書くことによって、やっと自分の生活の問題点をつかんだというレベルです。主体的に行動を起こせるような生徒は、ほとんどいません。生徒の変化に即応して軌道修正できるよう「進路指導プロジェクト」を学年全体で振り返る機会を、定期的に設ける必要があるかもしれません。

2002年に始めた「進路指導プロジェクト」の改革は、本校がSELHiの取り組みで目指した「Independent Learner（自立した学習者）」を全校に波及させることが出発点でした。生徒の層が変わりつつある今、再び原点に立ち返り、全校に波及させるようなインパクトある取り組みを、英語科が率先して実行していきたいと思っています。「GTEC for STUDENTS（注）」を英語科の生徒全員受験としたのは、その一環です。英語力の向上をテコに、世界に広く目を向ける生徒も育ちつつあります。そうした生徒が普通科の生徒を刺激し、切磋琢磨する雰囲気をつくっていきたいと思っています。

注　ベネッセコーポレーションが提供する、絶対評価スコア制の英語テスト

長崎県立
猶興館高校

推薦入試対策指導の確立

「推薦入試」という目標に向かって教師と生徒が一つになった

◎1880年、旧平戸藩主松浦詮が設立した私塾猶興書院が起源。1953年に現在の校名とした。2003年に理系学部進学を希望する生徒を対象とした理数科を設置。「自立・自発」の猶興精神のもと、文武両道を目指し、生活面・学習面だけでなく、部活動の指導にも力を入れ、バランスの良い生徒の育成を目指す。

設立
1880（明治13）年

形態
全日制／普通科・理数科／共学

生徒数
1学年200名

08年度進路実績
国公立大では、九州大や神戸大、広島大、大阪府立大など74名が合格。私立大では、福岡大医学部や東京理科大、西南学院大など、延べ80名が合格。

住所
〒859-5121　長崎県平戸市岩の上町1443

電話
0950-22-3117

Web Site
http://www7.ocn.ne.jp/~yukokan/

実践のポイント

1. 教師の負担を軽減するため、学校全体で指導を分担
2. 目標は面接ビデオで共有し、指導方法は教師に任せる
3. 教師の意識向上をねらい、推薦指導検討会を夏に実施

地域の信頼を得るために推薦入試重視の指導へ

「猶興館に入学して、大学進学は大丈夫なのだろうか――」

約10年前、猶興館高校の教師は、地域住民の学校に対する評価に危機感を募らせていた。同校の進学実績が低迷する中、学校のある平戸市内に大手予備校や塾がほとんどないことから、成績上位層の生徒が隣接する佐世保市や長崎市の高校に進学する傾向にあったからだ。教務主任の満行（みつゆき）洋介先生は当時を次のように振り返る。

「国公立大を中心とした進学支援の強化を検討しましたが、一部の成績上位の生徒を除き、センター試験でバランスよく得点できる学力のある生徒が少なくなり、一般入試で国公立大を狙うのは難しい状況でした」

そこで、同校が打ち出したのは、推薦入試の積極的な受験だ。3学年主任の堀光先生は、その理由を次のように話す。

「一般入試に合格できる総合力を育てることが理想ですが、現実的に難しい生徒が多くいました。ただ、苦手科目があっても、大学で学びたいという意欲の強い生徒には、大学で自主的に学びを深められる潜在的な力が備わっています。『総合力をつけさせるのが本筋ではないか』という声もありましたが、生徒の可能性を広げるために推薦入試重視の指導を始めたのです」

推薦入試対策の中心は担任の面接指導

2000年度、同校は文系・理系各1の進学クラスを対象として推薦入試対策を始めた。最も力を注いだのは面接指導だ。担任とのマンツーマン指導で、礼儀作法や話し方、本番で想定される設問の受け答えを繰り返し練習した。志望理由書は、何度も書き直しをさせた。

指導の方針について、堀先生は「生徒と膝を突き合わせて話し合うことによって、生徒に考えを深めさせ、読む者がハッとさせられるようなオリジナリティーのある言葉を引き出していくように心がけました」と話す。

指導強化の結果はすぐに表れた。推薦入試の出願者が増えた影響により、01年度の国公立大合格者数は00年度の49名から66名へと大幅に増えた（**図1**）。卒業生に占める国公立大合格者の割合も、約16%から約22%に上昇した。

ところが、次第にさまざまな課題が見えてきた。最も大きな課題は、担任の負担だった。面接指導では、副担任の協力があったものの、基本的には担任1人でクラス全員を担当していた。対話を繰り返す指導を心がけていただけに、生徒一人ひとりに費やす時間や労力は大きかった。更に、担任が専門外の教科についても指導しなければならず、必ずしも十分な指導ができているとはいえないという課題もあった。

「志望理由や大学で学ぶ内容については、学部や学科を理解していなければ、深く話すことができません。自分の教科の専門外の分野に関する本を読むなど、各自勉強してから指導していました」（堀先生）

担任の熱意や能力によって、年度ごとに進学実績のバラツキが見られたこともあり、02年度からは数名の教師で指導を分担するようにした。しかし、この段階では、個人的に親しい教師に頼んだり、担任経験者が自ら協力を申し出たりするなど、あくまでも任意のものであって、根本的な解決には至っていなかった。

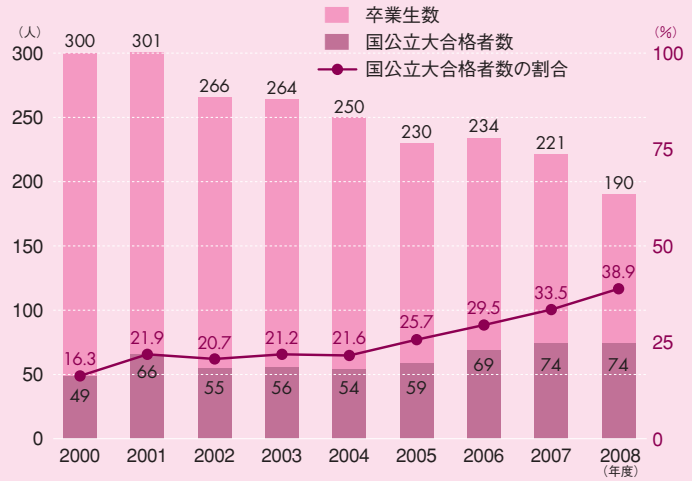
長崎県立猶興館高校
西川周二 Nishikawa Shuji
教職歴12年。同校に赴任して4年目。理数科主任。「素直で謙虚で人の話を最後まで聴ける生徒が最も伸びる。そのような生徒を育て続けたい」

長崎県立猶興館高校
満行洋介 Mitsuyuki Yosuke
教職歴20年。同校に赴任して10年目。教務主任。「地域から信頼され、安心して子どもを預けられる学校をつくりたい」現・長崎県立長崎東高校。

長崎県立猶興館高校
堀 光 Hori Hikaru
教職歴11年。同校に赴任して8年目。3学年主任。「本気で叱っても、教師と生徒が笑って話せる雰囲気をつくりたい」現・長崎県立長崎西高校。

長崎県立猶興館高校
山崎幸則 Yamasaki Yukinori
教職歴11年。同校に赴任して6年目。進路指導主事。「厳しさの中にも愛情の溢れる教育を忘れないようにしたい」

図1　国公立大合格者数の推移



国公立大合格者数、および卒業生に占める割合。少子化により年々生徒数は減少しているが、国立大合格者数は増加。卒業生に占める割合も右肩上がりに伸び、取り組みの成果が表れていることがわかる

担任の負担軽減のため面接、小論文指導を全員で分担

こうした課題を解決するため、06年度に進路指導主事に就いた山崎幸則先生を中心として、進学指導の組織化に着手した。進学指導は、教師にとって最も充実感のある仕事の一つだが、中にはそれを理解しつつも『自分にはできない』

＊プロフィールは取材時（08年3月）のものです

『そこまで時間をかけられない』と3年生の担任を避けたいと思っている教師もいた。「このままでは学校運営に支障が生じかねない」と、山崎先生は危機感を感じていたという。

そこで、まず1～3年生の教師全員で面接・小論文指導を分担する体制を整えた。理工学系の学部は理科、経済系は社会科、文学系は国語科、看護系は体育科というように、生徒の志望学部に合った教科の教師が、指導を担当するようにした。教科によっては、担当する生徒を固定せずに、複数の教師が順番に指導している。異なる視点からの指導ができ、また生徒の緊張感を持続させられるからだ。

教師全員が推薦入試指導を担当することになって、一人ひとりの負担は軽くなったが、今度は指導のレベルを一定以上に保つことが課題となった。そこで、特に若手教師には、本番直前の生徒が面接の練習をしているビデオを何度も見てもらい、「このレベルにまで達してほしい」と指導の到達目標を明確にイメージしてもらっている。

ただ、到達目標は共有するが、具体的な指導法はそれぞれの教師に任せている。

「それぞれの指導法を尊重することによってやりがいや責任感が芽生え、教師自身の成長を促せます。指導内容を統一するよりも、教師の専門分野を生かした指導を確立した方が、生徒に合わせた指導ができると思います」（堀先生）

図2 推薦入試対策の流れ

3年次

面接・小論文の指導
全教科の教師が分担することで、一人ひとりに時間をかけるきめ細かい指導を実現

志望理由書作成の指導
過去の事例を参考にして指導を効率化

出願先の検討、推薦書の作成
過去の受験から得られた情報を共有し、生徒の能力に合う出願先を検討。推薦書の作成も過去の書類を参考にして効率化

1・2年次

・資格試験などの受検の働きかけ
・ボランティア活動の推奨
・各種コンクールやコンテストへの応募
・出張講義などの大学との連携
・総合学習を活用した研究活動など

学力や学習意欲の向上に加え、推薦入試でアピールの材料になる活動を充実させるのがねらい

校内に一体感が生まれノウハウの継承が容易に

指導の分担による成果の一つは、「校内に一体感が生まれたこと」だ。以前は、入試結果に関心を示すのは3年生担任と一部の教師に限られていた。それが今では、教師全員が進路指導について当事者意識を持つようになり、職員室の雰囲気はがらりと変わった。

「進路指導主事や学年主任が『生徒が合格したのは先生の指導のおかげです』と、教師一人ひとりに言葉をかけることがよくあります。これは若手教師にとって非常に嬉しいことですし、自信にもつながります。そうしたムードが学校全体の士気を高め、指導が更に充実するという好循環が生まれています」（満行先生）

一方、生徒には「学校全体で面倒を見てくれている」という意識が芽生え、より真剣に学習に取り組む姿が見られるようになった。受験に取り組むクラスの雰囲気を壊さないようにと、推薦入試に合格した生徒もまじめに授業を受ける。中には、自主的にセンター試験を受験する生徒もいる。1、2年生には、「日々の授業をしっかり受けないと、先輩のように先生からの指導を受けられない」という雰囲気が広がり、授業への取り組み方が変わったという。「教師も努力していることを、生徒は感じてくれているのでしょう」と、堀先生は嬉しそうに話す。

大学への提出書類の対策にも着手した。推薦書や志望理由書は、過去5年分を製本して教師全員に配付。いろいろな書式を参考にしてもらうためだ。「書類作成が容易になり、生徒と対話する指導に時間を割けるようになりました」と、満行先生はその効果を実感している。

推薦入試の対策では、面接や小論文の出題傾向の見極めも重要なポイントだ。その点、各大学の出題内容や判定基準に関する分析が蓄積されているのは同校の強みとなっている。山崎先

生は次のように話す。

「推薦入試の場合、ある生徒が合格した、あるいは不合格だった理由は、教師個人の経験に頼る部分があります。全員で対策に取り組むようになってから、若手教師がベテラン教師に気軽にアドバイスを求められるような雰囲気が生まれました。こうしたコミュニケーションによりノウハウを継承したいと考えています」

07年度の夏には、教師の推薦入試への意識を高めるための新しい取り組みを始めた。3年生の各担任に、夏の段階で、「どの生徒を推薦するか」をリストアップしてもらい、学年で共有する検討会を実施したのだ。

「前年度も3年生の指導を経験した担任は、夏の段階で、どの生徒をどの大学に推薦するか、理由も明確になっています。ほかの教師にその様子を見せることで、意識を喚起できるのではないかと考えました。検討会のあとは、今年度の担任が前年度の担任に、推薦指導について尋ねる光景も多く見られ、ねらい通りでした」

入試でアピールできる活動を1、2年次で取り入れる

推薦入試のアピール材料となる活動は、1、2年次で積極的に取り組むよう指導。資格試験の受検、ボランティア活動や各種コンクールへの参加、NIE（新聞を教材とした学習活動）などの活用を奨励している。

理数科主任の西川周二先生は、「真のねらいは、生徒の学習意欲を向上させること。良い成果が出せれば、生徒の学習に対するモチベーションにつながりますし、それは結果として推薦入試対策にもなります」と話す。

取り組みの成果は順調に表れている。推薦入試指導を組織化した初年度の生徒が受験した07年度入試の国公立大合格者は過去最高の74名を記録（推薦入試合格者33名）。08年度入試でも、同じく74名が国公立大に合格した（推薦入試合格者44名）。

進学実績の向上は、地域住民からの評価を急速に高めている。入試担当として保護者や中学教師に接する機会の多い満行先生は、「『猶興館は生徒をしっかり指導してくれている』と言われることが増えました。かつては市外の高校に進学していた成績上位層の入学者が増えています」と、手応えを感じている。

今後の課題は、個々の教師の更なる指導力の向上だ。「推薦入試指導に関しては、入試の成功・失敗の原因を共有する場をつくることも必要だと考えています。また、推薦入試だけでなく、一般入試に合格できる総合的な学力をつけさせるために、指導力の更なる強化を図っていきたいです」と、山崎先生は意欲的だ。

校内に一体感を生み出し、進学実績の向上を実現した猶興館高校。その成果を支えるのは、受験という機会を生かし、生徒の人間的な成長を促そうとする教師の熱い思いにほかならない。

変革の明日を目指して

不合格時の指導こそ難しいけれども大切にしたい

理数科主任 **西川周二**

◎推薦入試対策が組織化された2006年度に初めて3年生の担任となり、受験指導を経験しました。指導が分担制になったとはいえ、時間的にも能力的にも難しさを感じたのは事実です。私は理科担当なので、小論文指導については力不足が否めず、国語科の先生にアドバイスを受けました。

担当教科の違う先生と気軽に連携できるようになったのは、組織化がスタートしてからです。1人の生徒に、担任、面接指導担当、小論文指導担当と複数の教師がかかわることで、生徒を多面的に見ることができ、生徒が合格したときの喜びは何倍にもなります。1つのゴールに向かって教師全員が一丸となって取り組む雰囲気が生まれたのは、生徒に目的意識を持たせる上で非常にプラスになっています。

個人的に課題として感じていることは、推薦入試で不合格となったときの指導です。生徒の気持ちを切り替えさせてセンター試験に向かわせるのは、最も難しさを感じる指導の1つです。推薦入試の合否の要因を目に見える形で共有できる仕組みを整えれば、より効果的な対策が可能になると考えています。

本校には、中学時代に勉強にあまり熱心ではなかった生徒も多くいます。そうした生徒をいかに目覚めさせ、可能性を広げていくか。今後も推薦入試の対策を軸にして考え続けたいと思います。

神奈川県立
菅高校

組織的な生徒指導による学校改革

「やればできる」教師の思いが学校を変え朝読書の成功で改革はより加速した

◎2004年度から、組織的な生徒指導の導入などによって、学校改革を積極的に推進。学校独自に「キャリア教育マスタープラン」を策定し、キャリア教育の充実も図る。07年度には部活動活性化が評価され、「かながわ部活チャレンジ賞」を受賞。

設立
1983（昭和58）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約230名

08年度進路実績
東海大、国士舘大、拓殖大、神奈川大、桜美林大、神奈川工科大、関東学院大、工学院大、大妻女子大、国際武道大など、延べ57名が合格。

住所
〒214-0004
神奈川県川崎市多摩区菅馬場4-2-1

電話
044-944-4141

Web Site
http://www.suge-h.pen-kanagawa.ed.jp/

実践のポイント

1. 教師による生徒指導のブレをなくすため、指導基準を明文化
2. 段階的な生徒指導で、生徒の不満の噴出を抑える
3. 朝読書の成功によって、試してみることが重要だと認識

入学から卒業までに1学年で30人近くが退学

「かつての本校を知る人は、現在の落ち着いた校内を見ると本当に驚かれます。それほど劇的な変化でした」

2000年度から菅高校で教壇に立っている野田麻由美先生はそう振り返る。以前の同校は、生徒の素行の問題で地域に知られた高校だった。始業時間になっても教室に生徒がそろわず、机の上には教科書ではなく漫画やお菓子ばかりが置かれていた。校内で暴力を振るう生徒もいて、男子トイレの扉はよく壊されるために鉄製になった。また、卒業までに1学年で30人近くが退学し、3割ほどの生徒が進路未定のまま卒業していった。

そうした状況を少しでも変えようと、野田先生が赴任したころから一部の教師によって生徒指導に力を入れはじめた。その過程で生徒の問題行動を助長している原因の一つに気づいた。

「生徒指導が教師一人ひとりに任されていたため、指導の基準がばらばらでした。学校としてのルールが曖昧だったため、生徒は教師によって態度を変えていたのです」（野田先生）

例えば、授業の遅刻は何分までは認める、という基準が教師によって異なっていた。ある教師は5分以上の遅刻でも出席扱いにしていたため、生徒は平気で遅れてくるという状況だった。

本間利之前校長の主導により、中長期計画を策定し具体的な対策を練る「将来構想委員会」が設置された。「教師が一丸となって指導にあたり、学校を変えよう」という熱い思いは明確な改革の流れとなり、04年度から3年間を第1期と位置づけ、学校改革が本格化した。

学校規則を明文化し生徒指導の観点を共有

同委員会はまず学校規則を明文化した「学年方針」（図1）を作成。教室の整頓やチャイム着席の励行、授業中の私語への注意など、指導基準を具体的に記し、教師の指導を統一させた。

特に強化したのは、授業中の見回りだ。授業のない教師が教室を見回り、指導が必要な生徒がいたら、授業中でも教室に入って注意した。次第に生徒は授業によって態度を変えず、きちんと授業を受けるようになったという。

「どの教師からも同じ指導を受ければ、生徒は学校のルールと認識し、自制心が生まれます」と、大泉政弘教頭は話す。

ただ、一度に指導を厳しくしてしまうと生徒から不満が噴出しかねないため、段階的に厳しくするようにした。まずは頭髪について指導し、改善されたら制服、次にピアスと、一つずつ問題をクリアしていこうとした。指導に対して抵抗する生徒も一部にはいたが、むしろ教師が驚くほど素直に聞き入れる生徒が多かった。

「比較的まじめな生徒が髪を茶色に染めていたので理由を聞くと、『茶髪にしないとまわりから浮いて目をつけられる』と言われ、驚いたことがありました。多くの生徒はまわりに合わせたり流されたりしているだけで、本心から問題行動を起こしているわけではないとわかりました。そのため、指導を厳しくしても、目立った抵抗がなかったのだと思います」（大泉教頭）

これらの方法は、生徒を着実に変えただけでなく、教師の意識も変えるきっかけとなった。「これが改善できたのだから、次もできる」と指導への自信を深めていったのだ。

校内の雰囲気を大きく乱していた遅刻についても、ルールを統一した。時間を分単位でカウントし、累積時間により欠席日数を積み上げていく方法にし、指導を徹底させた。

図1　23期生学年方針（抜粋）

1）生活環境

ア、机の整頓
- 32名学級の利点を最大限発揮するため、常に机の並びを整頓し机間巡視をしやすくする。
- 机間を十分とることで、私語を少なくする。

イ、教室の床
- 私物を置かない。
- 鞄は机のフックに掛けるか椅子の下に入れる。
- 教科書、ノート、ジャージ等を床に置かない。

ウ、私物の整理整頓
- パブリックスペース（共有スペース）を大切にさせる。

2）学習環境…教科担当者の協力

ア、チャイム着席の励行
- 廊下巡回者がチャイム前移動を促す。
- 教科担当者は次の授業の準備を促す。

イ、授業開始時、終了時の挨拶
- 挨拶の励行　雑然としたまま授業に入らない。
- 面倒がらずにきちんとさせる。全教員が要求することで可能になるのではないか。

ウ、授業に取り組まない生徒への日常指導
- 私語の絶えない生徒の指導。
- 妨害行為の生徒の指導。
- 暴言行為。
- 授業中の中抜け指導　現在は何回抜け出しても反省文で済ませているが、この体制でよいか。

基本的な指導に感じられる内容が多いが、重要なのは、教師が観点を共有すること。担任それぞれの考え方がある中で、全教師がこの方針の下に共通した指導を行い、生徒の規範意識を育てた

神奈川県立菅高校校長
小泉いづみ Koizumi Izumi
教職歴32年。同校に赴任して1年目。「生徒同士が互いに励まし合いながら切磋琢磨できる学校をつくりたい」現・神奈川県教育局保健体育課長。

神奈川県立菅高校副校長
勝又 修 Katsumata Osamu
教職歴27年。同校に赴任して2年目。「生徒には努力を忘れず、子どもに夢を与えられる大人になってほしい」現・神奈川県立鶴見総合高校副校長。

神奈川県立菅高校教頭
大泉政弘 Oizumi Masahiro
教職歴26年。同校に赴任して5年目。「自分を愛せない人間は他人を愛することはできない。自分自身を大切にできる生徒を育てたい」

神奈川県立菅高校
野田麻由美 Noda Mayumi
教職歴22年。同校に赴任して8年目。進路支援グループリーダー。「常に努力を続ける生徒を育てたい」現・神奈川県教育委員会高校教育課主幹。

神奈川県立菅高校
杉山崇裕 Sugiyama Takahiro
教職歴4年。同校に赴任して1年目。進路支援グループ。「環境が人を育てると思います。生徒に問題が見られたら、まず環境の改善を模索したい」

＊プロフィールは取材時（08年3月）のものです

「時間の計測は手間がかかりましたが、生徒には欠席扱いになることへの危機感が生まれ、遅刻者は大幅に減りました」（野田先生）

生徒が問題行動を起こす要因も取り除いていった。授業を抜け出した生徒の行き先を調べてみると、大半が校内の売店と自動販売機、来校する他校の生徒と会うことだった。そこで、授業中は売店を閉め、自動販売機の電源を切ることにした。学校の出入り口には当番制で教師が見張りに立ち、他校の生徒を断固として追い返した。

「生徒から何を言われても根気よく続けたことで、次第に『この学校には入れない』と思われるようになり、他校生が来なくなりました。これにより、校内の雰囲気はかなり落ち着きました」（野田先生）

朝読書の導入が生徒と教師の意識を変えた

生徒指導を厳しくする一方で、生徒の知的好奇心を刺激する取り組みも始めた。

最も効果的だった取り組みは、毎朝10分間の読書だ。導入前には、「定着するはずがない」と効果に懐疑的な教師が少なくなかった。ところが始めてみると、多くの生徒が読書に没頭し、1日の中で校内が最も静まり返る時間となった。教室に生徒がきちんとそろい、学習に向かう雰囲気が生まれることで、1時間目の授業をスムーズに始められるようにもなった。

「遅刻指導と並行して導入したことによる相乗効果もあったのでしょう。漫画や写真集、教科書を除き、好きな本を自由に読ませたことも定着した要因だと思います」（大泉教頭）

朝読書は保護者からの評判も高く、ある生徒の父親は「うちの息子に読書習慣が身につくなんて思ってもいなかった」と、大喜びで電話をかけてきたという。

朝読書の成功は、教師の意識改革にもつながった。「『無理だと思っても試してみよう。仮に失敗しても別の方法を考えればよい』と前向きに対処する気持ちが生まれました」（大泉教頭）

学校が落ち着いてから学力向上へ着手

改革開始から2年が過ぎた06年度ごろには、校内はすっかり落ち着きを取り戻していた。04年度には1日平均8人いた遅刻者が、06年度には2人に減少。授業中に歩き回る生徒はほとんどいなくなり、頭髪や制服の乱れも目立たなくなっていた。同校は、生徒指導の負担が軽減したことで、指導の重点を学習に移していった。

ところが、そこで初めて見えた課題があった。生徒の学習意欲の希薄さだ。

「自分に自信がなく、『勉強をしても意味がない』『どうせできない』といった消極的な生徒が多くいました」（野田先生）

生徒へのアンケート調査では家庭学習時間が「ゼロ」という回答が目立ち、学習の進め方を理解していない生徒も多くいた。そこで、06年度に「学習の手引き」という冊子を作成して配付。「高校から勉強をやり直しても遅くない」「勉強すれば着実に学力は伸びる」といった学習意欲を引き出すメッセージを強調した上で、学習計画の立て方、教科ごとの学習の進め方、自宅学習への取り組み方などを説明し、「やってみよう」という気持ちを起こさせるように努めた。

英検や漢検などの受検も奨励した。単に受検を勧めるだけでは「受かるはずがない」と敬遠する生徒が多いと考え、授業で模擬テストを行って「これなら自分も合格しそう」と思わせるようにした。更に、ベネッセコーポレーションの「進路マップ　基礎力診断テスト」を導入。テスト前には宿題として「One-week Trial」（注1）に取り組ませ、十分に準備をさせてからテストに取り組ませた。

「努力の成果がテストの結果として表れることにより、達成感を実感させることがねらいでした。成功体験を積み重ねることで、次第に生徒の中に自信が芽生え、テストを楽しみにする生徒も現れました」（大泉教頭）

また、大学進学希望者を対象とした「特進クラス」を、1年次に2クラス設置。補習と宿題

注1　「進路マップ　基礎力診断テスト」の事前、または事後に取り組む学習教材

の充実によって学力向上を支援し、キャリアガイダンスでは進学指導を重点的に行った。大学進学者が決して多くはない中で特進クラスを設置したねらいを、小泉いづみ校長は次のように話す。

「『これから学び直して大学に進学したい』という生徒は多くいます。学力には関係なくクラスを編成し、やる気のある生徒をとにかく支援することにしました」

今後の課題は指導力向上とキャリア教育の充実

07年度から2年間は第2期として、改革の重点を学習指導に移した。基礎的な学力の定着と、応用力をつける指導を確立させるのが目標だ。杉山崇裕先生は次のように話す。

「板書をきれいにノートに整理できても、学習内容を自分の言葉で伝えることができない生徒がほとんどです。自分の頭でしっかり考える習慣をつけさせるのが先決と考えています」

そのためには教師の指導力向上が欠かせないと、大泉教頭は指摘する。

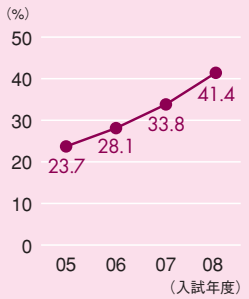
「学習指導に重点を移してから、授業に関しての課題が明確になりました。生徒の授業評価から見えたのは、当然のことですが、生徒はわかる授業を渇望しているということです。08年には従来の研究授業をもう一歩推し進め、指導力の底上げを図っていきます」

これまでの取り組みにより、進学率は毎年5%程度ずつ上昇し、08年度の入試実績は初めて40%台に達した（図2）。しかし、生徒には「大学ならどこでもよい」という意識がまだ強く、将来を見据えた大学選びが必ずしもできていない。そこで、09年度からの2年間は第3期として、キャリア教育の充実を図る方針だ。副校長の勝又修先生は次のように話す。

「キャリア教育を充実させて、生徒に自分自身を深く見つめ直す機会を与え、『どのような人間になりたいか』『何を学びたいか』といった明確な考えを持たせたいと考えています。本来、大学選びはそこから始めるべきでしょうし、充実した人生を実現するには不可欠な視点だからです」

ごく基本的な生活指導からスタートした同校の改革は、4年を経て、地域住民のだれもが「ここまで変わるとは」と驚くほどの成果をもたらした。だが、特効薬があったわけではない。教師が一丸となって根気強く問題に取り組み、次第に目標のレベルを高めていく。そのような方法で同校は、未来に向けて着実に前進している。

図2 大学・短大への進学率の推移



組織的な生徒指導を始めてから、授業が落ち着きを取り戻した。その成果は進学実績に着実に表れている

変革の明日を目指して

広報に力を入れ地域から愛される学校を築きたい

進路指導担当 **杉山崇裕**

◎私は2007年4月に本校に赴任しました。ほぼ全員の生徒がチャイムの鳴る前に着席している光景にまず驚きました。「ずいぶん指導が行き届いているな」と感心していたら、数年前まで問題行動が頻発していたと聞き、更に驚きました。その裏には、チャイムと同時に授業を開始するための準備を徹底するなど、教師自身の努力や心がけがあります。教師が変われば生徒も変わることをつくづく実感させられました。

07年度には、「学習の手引き」の改訂作業を任されました。工夫したのは、学習に興味を持ってもらうために、生徒により親しみやすい冊子にしたことです。挿絵を入れて読みやすくし、「高校生活で良いスタートを切るには」「ゴールをどのように定めるか」など、生徒の視点を取り入れた内容を充実させて、より一層、自主性を引き出すことを目指しました。

生徒指導はもちろん重要ですが、本来、教師が最優先すべきは授業だと思います。授業で生徒を満足させられなければプロを名乗ることは許されない、というのが私の考えです。私自身はまだ知識も指導技術も未熟で、工夫が必要なことも少なくありません。常に自分自身の成長を心がけたいと思います。

地域住民から「こんな学校は要らない」とまで言われたころに比べると、今は天と地ほどの差があります。しかし、信頼が崩れるときは一瞬ですから気は抜けません。悪い噂に比べ、良い噂は伝わりにくいものですから、今後は広報活動にも力を入れて、地域に愛され、気軽に立ち寄ってもらえる学校を目指したいと思います。

小さな疑問を粘り強く考え抜くことが学問の進歩を生み出す

O EIICHI

東京大名誉教授　日本学士院会員

星野英一

日本の民法典の多くはフランス民法典から影響を受けていることを明らかにし、戦後の民法学界に一時代を築いた星野英一東京大名誉教授。一般市民や学生向けの法関連書籍の編纂、民法の普及活動にも尽力した星野教授の法律とのかかわりについて聞いた。

未知なるものに憧れた学生時代

子どものころから「未知なるもの」への関心が強かった私にとって、本を読むことは大きな喜びでした。小学校に上がる前からクリスマスプレゼントには毎年、本をもらい、世界の国々はどこにあるのだろうと百科事典を眺めたり、『ロビンソン・クルーソー』や『小公女』を読んで外国に思いをはせたりしていました。小学時代に読んだ本で特に印象に残っているのは、少年の精神的成長を描いた物語『君たちはどう生きるか』（吉野源三郎著）です。その中にある「偉大な発見がしたかったら、いまの君は、何よりもまず、もりもり勉強して、今日の学問の頂上にのぼり切ってしまう必要がある」という一節に感銘を受けました。幼心にもとにかく勉強しなければならないことを強く感じ、学問への憧れを抱くきっかけになったのです。

高校時代は太平洋戦争真っ只中。その影響で、高校生活は2年間に短縮され、勤労動員にも駆り出されて、学校ではろくに勉強できませんでした。しかし、私の通っていた旧制第一高等学校（現・東京大）は、軍国主義の時代にあっても自由と寛容の精神がありました。全国から優秀な生徒が集まる全寮制で、同学年の者や先輩と夜を徹して「本当の意味での良い国とは何だろう」と語り合いました。そんな状況下だったからこそ、学びへの意欲は更にかき立てられたのだと思います。

民法の奥深さに惹かれて学者を志す

高校卒業後は、父が弁護士だったこともあり、東京大法学部に進み、明治以降最も著名な民法学者といわれる我妻榮（わがつまさかえ）先生に学びました。民法は全１０４４条あり、学問としての歴史も古く、その起源はローマ法にまで遡ります。ところが、我妻先生は講義で「ここから先は今後の問題です」とよくおっしゃいました。「我妻先生でも、まだわからないことがあるのか」――未知なるものへの興味・関心が強かった私は「民法はなんて奥が深いのだろう」と感じ、民法学者を志すようになったのです。

学びへの意欲はありましたが、大学時代は我妻先生の講義に圧倒され、先生の著書である『民法講義』のような本は書けないと思っていました。また、法学は自然科学のような飛躍的な発見はなく、アイデアが浮かんでもだれかが既に発表していることがよくあります。ですから、我妻先生の講義を聞いて疑問を抱いていても、しっかり論証できる根拠にたどりつくまでは通説に従っていました。

ただ、一度抱いた疑問はいつも頭の片隅に持ち続けるようにしていました。その一つが、日本の民法典はドイツ民法典ではなくフランス民法典の影響を受けているのではないか、という疑問でした。

当時、日本民法典のモデルはドイツ民法典という考

HOSHIN

えが、法律家全般の通説でした。弁護士の父にも「法律を学ぶなら、ドイツ語とドイツ法を勉強せよ」と言われました。しかし、私は学生時代にフランス法学に触れ、「日本民法には、フランス的な緩やかさがある。フランス法の影響を受けているのではないか」と考えるようになったのです。ドイツ全盛時代でしたが、私はフランスに留学。日本では部分的にしか紹介されていなかったフランス民法とフランス法学を、それを生み出した背景を考えつつ学びました。そして、日本民法典の中にはドイツ民法典に存在しない制度が存在するなど、フランス民法典に多くを負うとの結論に至ったのです。学生時代に抱いた疑問を持ち続け、粘り強く考え、調べたから得られた成果でした。

疑問を持つことが問題解決の第一歩

私は、なぜ定説を覆すような研究に打ち込み、のちに「フランス民法典のルネサンス」と呼ばれることになった研究動向を開くことができたのか。それは、「問題を持つことは、解決に進んでいることだ」という東京帝国大・南原繁総長の教えが、学生時代から心に刻まれていたからかもしれません。そして何より、「民法を学ぶには、まず民法の各制度・各規定の意味や趣旨を理解し、ルーツを明らかにする必要がある」という一念があったからだと思います。まさに『君たちはどう生きるか』の一節に学んだ精神が、私を突き動かしていたのでしょう。「現在の最高峰の学問を修得し、その上に立って研究しなければならない」。これは学者としての最も大切な信条となったのです。

当時、下火であった法解釈学にこだわって研究を続けたのも同様の理由です。戦後の日本の民法学は、社会で法制度がどのような働きをしているのかという「法社会学」が盛んに研究されていました。しかし、私は「民法を勉強する以上、伝統的な法解釈学を学ぶことが出発点になる」と感じていました。その中で、何とかして新しい学問の方法論を見つけたいと考え、当時の民法学に一石を投じることになる「利益考量論（注）」という法解釈の方法を提示することができたのです。

学生時代には、学問でもスポーツでもよい、何か打ち込むものを持ってほしいと思います。そして、疑問を抱いたらいつまでも持ち続け、機会があれば突き詰めて考えてみてください。疑問を自分の中でごまかさないということが大事です。いつか新しい発見につながるかもしれません。これは学者だけではなく、社会で生き抜くためにとても大切なことだと思います。

ほしの・えいいち　1926年大阪府生まれ。東京大法学部法律学科卒業、東京大法学部教授、千葉大法経学部教授、放送大教養学部教授を歴任。長年に渡り民法を中心とする法改正に従事し、法制審議会民法部会等の委員・部会長を務めた。93年紫綬褒章受章、07年文化功労者。現在は、東京大名誉教授、日本学士員会員。主な著書に『民法概論Ⅰ～Ⅳ』（良書普及会）、『民法のすすめ』（岩波書店）などがある。

◎本コーナーに登場する研究者は日本学士院の会員の方々です。日本学士院は、学術上功績のあった科学者を優遇するための機関で、人文科学70名、自然科学80名が在籍し、新会員の選定、公開講演会等などの活動を行っています。会員に選定されることは研究者として名誉なこととされ、日本学士院賞は我が国の学界では最も権威ある賞として、毎年初夏に行われる授賞式には天皇皇后両陛下がご臨席されます。http://www.japan-acad.go.jp/

注）法律解釈を、実質的な利益のバランスを重視して判断していく考え方

北海道大大学院 文学研究科 人間システム科学専攻・行動システム科学専修

社会心理学

人間はほかの人々との集団の中で生きている社会的動物である。人間の心を研究するときに「社会」は欠かせず、また社会の研究をするときには「人」が欠かせない。その両者をつなぎ、人間の心の社会性について研究しているのが社会心理学だ。

社会心理学って？

「社会」に生きる人間の「心」を解明する

社会心理学は、社会的存在としての人間の心の性質を、実験や調査などによって科学的に解明していく心理学の１分野だ。人間の心そのものに焦点を当てるだけでなく、社会や文化といった人間の心に影響を与える大きな要素にも注目する。心理学によって科学的な心の解明が進んだ今では、身体と同様に、心も進化の過程で獲得されてきた適応のための道具であるという考え方が浸透しつつある。社会心理学は人間の心と社会の性質を正しく理解し、それを社会の制御のために使う方法を生み出そうとしている。

教授が語る

社会に適応して進化した人間の心が持つ社会性とは何かを追究

山岸俊男 教授

やまぎし・としお　一橋大大学院社会学研究科博士後期課程単位取得退学。ワシントン大学大学院社会学研究科博士課程修了、Ph.D.取得。北海道大文学部助教授、ワシントン大学社会学部助教授等を経て、現在、北海道大文学研究科教授。グローバルＣＯＥプログラム「心の社会性に関する教育研究拠点」拠点リーダー。主著に『信頼の構造』（東京大学出版会）、『日本の「安心」は、なぜ消えたのか』（集英社インターナショナル）など。

研究テーマ

文化だけでは説明しきれない人間の心の動き

社会心理学は今では、心理学の1分野と定義されることが多くなりましたが、ほかの心理学の分野と大きな違いがあります。それは、心理学の他分野では「個」の人間が研究対象であるのに対し、社会心理学では「集団」における心理を研究していることです。

心理学では、人間の脳が「どのように」働いているのかを研究しています。しかし、人間の脳が「なぜ」そのようなことをするのかと考えたとき、「社会」とのつながりを考えることが重要になります。なぜなら、ほかの生物と同じように、人間の脳も進化して今のような形になったからです。つまり、今、私たちの脳で起きている働きは進化の産物なのです。では、脳が進化する際に一番適応しなければならなかった環境は何か。それは「社会」です。人間は元来、社会的動物であり、社会でうまく立ち回って生き残った人たちの子孫が私たちです。脳は社会で生き抜くことができるように私たちを行動させているといえるのです。ですから、心理学であっても「社会」の側面から研究することは重要なのです。

一方、[1]社会科学の中でも心理学は必要です。社会科学では、複数の人が集まったときにどういう行動パターンが生まれるのかを調べています。当然、人の心理を知らなければ研究できません。例えば、経済学の中でも心理学は非常に重視されていて、[2]行動経済学という分野もあります。

つまり、社会で生きている人の研究には、社会と心理の両面から見ていく必要があり、社会心理学はまさにその研究をしている学問なのです。

私の研究室では、主に二つのテーマを扱っています。

一つは、「利他行動」についてです。人間には、自分の利益だけではなく、他人の利益を優先させたり、他人に協力したりする性質があります。道徳や倫理は利他行動を発展させたものであり、社会がうまく機能している理由でもあります。では、人間はなぜ利他行動をとるのでしょうか。サルの利他行動についても研究されていますが、肯定と否定の両説があります。ところが、同じ類人猿でも、人間は利他行動を取る動物だとはっきりいえます。つまり、人間はサルにはない何かがある。それを解明することは、社会をよりよくするヒントになるはずです。

もう一つは、「社会的適応」行動が生み出す社会制度についてです。私たちは、行動や価値観の違いの理由を「文化が違うから」とよく説明します。例えば、日本は[3]集団主義文化の社会であり、アメリカは[4]個人主義文化の社会だといわれていますが、果たして本当にそうなのでしょうか。

それを解明するために、研究室である実験をしました。5本のペンを用意し、そのうち1本を異なる色にしておきます。被験者に「調査協力のお礼として1本差し上げます。好きなペンを選んでください」と言って5本のペンを差し出します。日本人はみんなと一緒が好き、アメリカ人はユニークなのが好きという文化の違いであれば、日本人には数の多い色のペンを選ぶ人が多く、アメリカ人には1本しかないペンを選ぶ人が多い、ということになります。

まず、普通にペンを選んでもらう

＊プロフィールは取材時（08年3月）のものです

写真　ペン選択実験で使われたペン。ペンの色（そのもの）が影響を与えないよう、色や形などを慎重に選び、被験者に提示するときには透明なペン立てに入れた

と、その通りの日米差が見られました。しかし、「あなたは最初に選ぶ人です」と伝えると、アメリカ人も日本人と同じくらいの割合で数の多い色のペンを取り、「あなたは最後の人です」と伝えると、日本人でもアメリカ人と同じくらい、数の少ない色のペンを取るようになります。自分の選択が他人に影響する場合には、アメリカ人も日本人も同じように遠慮をし、最後だから他人に影響しないと思えば遠慮しなくなる、ということで「みんなと一緒が好き」「ユニークなのが好き」という意味での文化の違いはありませんでした。

このように、人はまわりの評価によって自分の行動を変える動物だといえます。私たちは、その行動規則は何であるのかを解明しようとしているのです。

研究の目標

心の科学的な解明が意味ある社会制度をつくっていく

うまく機能する社会制度をつくるためには、「人は社会でどのような行動をするのか」を考慮することが大切です。今後、社会と心理の両面を研究する社会心理学は、社会制度づくりにおいて重要な役割を果たしていくと考えていますし、それに貢献していくことが研究の目標です。

その一例を示します。アメリカで1970年代から始まったアファーマティブ・アクション[5]は、入試や人材採用において特定の人種や性別による差別をなくすため、それらの人々に対して合格基準・採用基準を積極的に優遇するという制度です。

歴史的に、黒人やヒスパニック系等の民族はアメリカの社会で差別を受け続けてきました。そのため、高いレベルの教育を受けても社会の中で役立てる機会がなく、それならば教育に投資する必要はないと高等教育を受けようとしなくなり、社会的地位も低いままで差別を受け続けるという状況でした。

この悪循環を断ち切るため、強引と感じられても差別をしない環境をつくろうと始められたのが、アファーマティブ・アクションです。この制度により、差別されていた人たちが大学で勉強し、卒業後には身につけた知識や専門性を役立てる場が保障されることになりました。差別されない環境になったのなら、大学に行こうという気になりますよね。つまり、この制度は差別されている側のインセンティブ[6]を変えたのです。「差別する人の偏見をなくせば、差別はなくなる」と訴えるだけでは、いつまで経っても社会は変わりません。枠組みを変えることで人の意識を変えられることを、アファーマティブ・アクションは示しており、心の動きをうまく突いた制度といえます。

これまでの社会科学は、主観的経験や理論による研究が主でした。しかし今は、自然科学と同じように、実験や調査という科学的な手法によって研究されるようになっています。20世紀は自然科学の発展により科学技術が花開いた世紀でしたが、21世紀は社会科学が科学的に研究されていくことで、社会がよりよく機能する時代になると考えています。その中でも人と社会をつなぐ社会心理学は、社会科学全般をリードしていく中心的学問になると思うのです。

高校生へのメッセージ

たくさん本を読んで視野を広げよう

高校時代や大学時代には、たくさん本を読んでください。専門書でなくても、小説でも評論でもかまいません。いろいろな著者のさまざまな考えに触れることで、物事を見る目が養われ、視野は広がります。これはどんな仕事にも必要な力です。テレビやインターネットからでも情報は得られますが、これらは深く読み込むことが難しいメディアです。

本は読むのに時間がかかる分、じっくり向き合えますし、わかった気にならずに疑問として持ち続けることができます。時間のある今こそできるだけ多くの本を読み、社会の見識を広げてください。

高校生にお薦め入門書

『安心社会から信頼社会へ ～日本型システムの行方～』
（山岸俊男著／中央公論新社）
◎日本社会は、実は「信頼」ではなく「安心」の上に成り立っていて、その安心も崩壊しつつあります。今の日本社会を生きている私たちが、どのような社会をつくっていけばよいのかを、実験結果と理論によって論じています。

『社会心理学キーワード』
（山岸俊男編／有斐閣）
◎社会心理学では何をテーマに研究をしているのか、どのような方法で実験しているのか。見開き２ページ単位で解説。社会心理学がどのような学問かをつかめる1冊。

大学院生が語る

人が生まれながらに持つ社会性とは何か

橋本博文さん
はしもと・ひろふみ
北海道大大学院文学研究科
人間システム科学専攻行動システム科学専修
修士課程1年
（香川県立高松西高校卒業）

なぜこの研究を？

1冊の本を機に志望を転換

私は高校卒業後、地元国立大の教育学部に進学し、教師を目指していました。教師にとっていじめは避けて通れない問題です。自分なりに勉強しようといろいろな本を読んだのですが、いじめの起こる要因は「いじめをする心を持っているから」と大半の本が論じていました。だれもがいじめはいけないとわかっているのに、なぜなくならないのか。いじめをする人の心の問題を解決すれば、解消される問題なのかと疑問を抱いていたとき、山岸先生の著書『心でっかちな日本人』（日本経済新聞社）に出合ったのです。

子どももインセンティブに従って行動する。いじめを止めに入ったときに、ほかの人が助けてくれると思えば、安心して止めに入ることができる。しかし、ほかの人は傍観していると思ったら、本心ではいじめはダメだと思っても、止めに入ることはできない――。本に書かれていた説明で、いじめがなくならない理由にやっと納得できました。

これをきっかけに社会心理学を勉強したいと思い、著者である山岸先生のいる北海道大に3年生のときに編入したのです。

研究のテーマ

行動の違いが生まれる要因は何か

私は、人間の意識的な選択を必要としない行動について研究しています。先日行った実験を紹介しましょう。

日本人にあるテストを行い、終了後、自分の結果は平均点より上か下かを質問しました。すると、69％の人が平均より下だと答えました。ところが、その予想が当たっていたらお金を差し上げますというボーナス条件をつけたところ、逆に69％の人が自分の結果は平均点より上になると答えたのです。この結果から、日本人は自分が平均より上だと思っていても、自己提示の戦略として自己卑下的な行動を取る傾向にあることがわかりました。同様の実験をアメリカ人に対して行ったところ、女性の場合は日本人と同じように、ボーナス条件がなければ自己卑下的な行動をするという結果が出ました。ところが、男性の場合、お金に左右されませんでした。

この実験では、人間の意識的な選択を必要としない行動について、条件を変えることによって解明しようとしています。更に、なぜ条件によって行動の違いが生じるのか、文化に起因するのか、性差なのか、今後、研究を重ねていきたいと思います。

今は、人間と社会との関係を知りたい一心で、研究に没頭している日々です。ただ、最初に教師を志したように、将来は教育に関する社会制度をつくる仕事にかかわりたいと考えています。

橋本さんの1日

- 7:00 **起床**　新聞を手に、徒歩で大学に向かう
- 8:30 **研究室到着**　ゼミで使うレジュメを整理したり、新聞を読んだりする
- 10:00 **ゼミ開始**　実験の進捗状況や結果を基にした考察などを話し合う
- 12:00 **昼食**　忙しいときは弁当で済ませてしまう
- 13:00 **ゼミ再開**　討論が白熱するとあっという間に時間が過ぎ、気がつくと17、18時ということも
- 19:00 **夕食**　学食や近くの定食屋で夕食
- 20:00 **実験準備**　自分の研究のための準備を進めたり、レポートを書いたりする
- 23:30 **帰宅**　研究が忙しくなると、帰宅時間はもっと遅くなる

高校生へのメッセージ

背伸びをしてでもやりたいことに挑戦を

興味のあることには何にでもチャレンジしてください。たとえ失敗しても、しないで後悔するよりましです。「自分の能力はこんなもの」と決めつけたりせず、背伸びをしてでも挑戦をしてください。

また、新聞を読む習慣はとても大切です。インターネットでニュースをチェックするだけでは、ニュースの背景などまでつかむのは難しいからです。私は今でこそ毎日読んでいますが、高校時代は全く読んでいませんでした。だからこそ、皆さんにお勧めします。

用語解説

❶ 社会科学
法律や政治、経済など社会で起きている現象を、観察・分析といった手法を基にして研究する学問分野。

❷ 行動経済学
経済活動において、人々の選択、行動やその結果について研究する、経済学の1分野。

❸ 集団主義文化
個人よりも集団に価値を置く、あるいは自分の利害よりも自分の属する集団の利益を優先する価値観・考え方のこと。

❹ 個人主義文化
集団よりも個人に価値を置く、あるいは自分の属する集団の利害よりも自分の利害を優先させる価値観・考え方のこと。

❺ アファーマティブ・アクション
アメリカで、雇用の機会均等を目指し、差別をなくすために設けられた制度。アメリカ政府と関係する機関は、この制度の実施が法的に義務付けられているが、自主的に行う企業や学校、団体も多い。「逆差別になる」として否定派も多く、反対運動や裁判が起きている。

❻ インセンティブ
人の行動や意思決定を促すための、外部から与えられる刺激・要因のこと。

＊プロフィールは取材時（08年3月）のものです

VIEW'S REPORT

岩手県立 久慈高校（くじ） | 広島県立 三次高校（みよし）

地方公立高校の挑戦

「地方区」から「全国区」へと意識改革

地方の公立進学校とひと口に言っても、都市部とそれ以外の地域では事情が大きく異なる。郡部や山間部を取り巻く社会状況が厳しさを増す中で、生徒をどのように指導すればよいのか。全国レベルを意識した改革を進める岩手県立久慈高校と広島県立三次高校の挑戦を紹介する。

課題	成績上位層が都市部進学校へ流出
	難関大合格の指導ノウハウが不十分
	競い合う経験の乏しい生徒
	学校への保護者・地域の期待が大きい
実践のポイント	チームワーク重視の組織づくり
	外部から積極的に情報を集める
	成績上位層を引き上げる仕組み

地方公立高校の課題と実践のポイント整理

【課題】

①成績上位層が都市部進学校へ流出

地元中学校の成績最上位層は、東京大・京都大など最難関大への合格実績が高い都市部の高校へ進学する傾向がある。成績中・下位層が多い。

②難関大合格の指導ノウハウが不十分

成績中・下位層を伸ばすノウハウはあるが、難関大を狙う層が少ないため、成績上位層に対する指導や意欲向上のノウハウが蓄積されにくい。

③競い合う経験の乏しい生徒

生徒たちは小さな地域社会の中で育ち、性格が素直。社会の中で揉まれた経験が少なく、全国区で競い合おうとする意識が弱い。

④学校への保護者・地域の期待が大きい

多くの生徒たちは学校の教師だけを頼りに受験勉強を進める。経済的に厳しい中で、「是非国公立大に」という保護者や地域の期待は大きい。

【実践のポイント】

①チームワーク重視の組織づくり

学年、各教科会、学校が一体となって、授業や補習、個別指導に組織的に取り組む体制を整える。

②外部から積極的に情報を集める

先進校の視察に積極的に出かけ、全国の進路指導との違いを肌で感じる。これが教師の意識改革を促す。

③成績上位層を引き上げる仕組み

成績上位層を引き上げていく個別指導体制を確立。高い能力があっても更なる上位校に挑戦しない生徒の意識を高める面談を繰り返す。同時に、成績下位層や就職希望者にも手厚く支援し、学年全体で希望の進路をかなえていく雰囲気を醸成する。

岩手県立 久慈高校

教師たちの「勢いと自信」が生徒一人ひとりの高い「志」を支えた

久慈市は
盛岡市から車で約2時間30分

地域振興策の一環として県教委もサポート

2008年春、岩手県北部・三陸沿岸に位置する人口約4万人の久慈市に驚きが広がった。地元・久慈高校から18年ぶりの東京大現役合格者（理科Ⅰ類）と初の京都大現役合格者（法学部）が出たのだ。

久慈市は交通の便が悪く、基幹産業があるわけでもない。大学受験のための予備校や塾もない。同校の生徒が自宅から通える大学は、隣接する青森県八戸市内にあるだけだ。経済的に厳しい地域だけに、「国公立大が無理なら就職してほしい」という保護者の思いも根強くある。だからこそ、「勉強でも部活動でも、この地域の生徒の意欲に応えたい」と、同校に赴任した教師は皆、そうした思いを強く抱き続けてきた。

しかし、地元中学校の成績最上位層は、東京大や医学部といった最難関大の合格実績が高い盛岡市内や八戸市内の進学校へ進むのが当然という状況だった。それでもここ十数年、同校は国公立大に1997年度（卒業年度）の100名を最高に60～80名前後が現役で合格している。佐藤隆一先生は「都市部の進学校とは違い、県の平均かそれ以下の学力で入学してくる生徒を、先生方は土日も休まず手塩にかけて指導し、生徒の進学希望に応えてきました」と話す。

一方、東北大の合格者は05年度から2年連続してゼロ。成績上位層を引き上げる指導力に課題があった。

「先生、うちの子を久慈高に入れたら、医学部に進学させられますか」

かつて、中学生の保護者からそう問いかけられた中田裕治先生は、「はいともいいえとも言えず、十数年前に医学部に合格して医師になった卒業生がいるという事実しか伝えられませんでした。結局、その生徒は盛岡市内の進学校に進み、国立大医学部に入ったようです」と、無念さをにじませる。寒河江（さがえ）和広先生も「久慈高に入ってもどうせだめだ、と言われるのが一番悔しい」と語る。

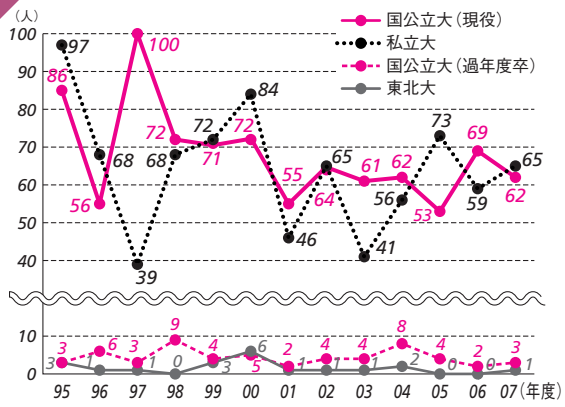
県北・沿岸地域の振興策は県政の重要課題でもある。岩手県教育委員会主催の「県北・沿岸地域人材育成支援事業」の一環として、同校の副校長は特別増員で2名体制となり、06年度に坂本晋（すすむ）副校長が着任。07年度には鈴木晃彦（てるひこ）副校長が着任した。共に県内トップの進学校・岩手県立盛岡第一高校の進路指導主事経験者というテコ入れ策だった。

「目玉づくり」による活性化が一気に加速

「3年生に東京大に合格できる力のある生徒がいます」

07年春、上原（かんばら）耕太郎校長が同校に赴任して早々、坂本副校長が相談したときから、学校の活性化が加速し

図1 久慈高校の大学合格者数の推移（卒業年度）



School Data

設立	1943（昭和18）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約200名
08年度入試進路実績	国公立大には東京大1名（現役）、京都大1名（現役）はじめ、東北大、岩手大、弘前大、岩手県立大など65名が合格。私立大には早稲田大、明治大、岩手医科大、東北学院大、盛岡大など、延べ65名が合格。
住所	〒028-0033 岩手県久慈市畑田第26-96
電話	0194-55-2211
Web Site	http://www2.iwate-ed.jp/kuj-h/

◎後列左から

鈴木晃彦 副校長
佐藤隆一 1学年付（3学年担任）
齊藤 奨 1学年長（3学年担任）
竿代愛也 進路指導主事（3学年担任）

◎前列左から

伊東浩二 1学年担任（3学年担任）
寒河江和広 3学年長（3学年長）
上原耕太郎 校長
中田裕治 3学年副担任（3学年担任）
坂本 晋 副校長

（　）内は07年度の校務分掌

た。入学当初から京都大志望を貫いている3年生もいた。

教師の動きは早かった。4月10日に相談を受けてすぐ校長、副校長の3名で話し合い、その日の11時から3学年長と進路指導主事を集めて戦略会議を開いた。上原校長が生徒の進路実現と学校活性化の方針を打ち出し、今後の段取りを話し合った。12日には、成績上位者を対象にした個別添削指導を行うことを決めた。

「私は成績上位の数名のみを添削指導するつもりでしたが、鈴木副校長は先進校の事例を引き合いにして『指導対象の生徒を3倍に増やさないと実績は上がらない』と提案されました。そこで、部活動や生徒会でリーダー的な生徒も対象とすることにしました」（寒河江先生）

17日には東京大・京都大・医学部などを目指す「Aメンバー」8名、東北大などを目指す「Bメンバー」13名を選抜し、学年の枠を超えて教科に担当を割り振り、個別添削指導が始まった。

「例年、6月からの高校総体が終わらないと『これから受験勉強だ』という雰囲気にならないのですが、4月から動き出せたのがよかったのだと思います」（寒河江先生）

添削課題は科目によって異なるが、Aメンバーは志望校（東京大・京都大）の過去問題、Bメンバーは東北大の過去問題が中心だった。Bメンバーの数学を担当した伊東浩二先生は「東北大模試などを参考に問題を選びました」と話す。

実は、東京大に合格した生徒は当初、東北大を志望していた。そこで、上原校長が約2か月かけて説得した。

個別指導メンバー以外の生徒を手厚く支援

A・Bメンバーに選ばれなかった生徒への支援も欠かさなかった。

07年度の3年生は国立大を目指す理系・文系が各2、私大文系1の計5学級。上原校長は週1回、私大文系クラスで講話を続け、意識の向上を図った。また、就職希望者には、すべての教師が親身になって面接の受け方などを熱心に指導した。

竿代愛也先生は「A・Bメンバーには個別指導をしているため、授業ではむしろメンバー以外の生徒に目を向けました」と話す。齊藤奨先生も「『受験は団体戦』というフレーズを浸透させながら、メンバー以外の生徒も引っ張れるような形にしようと意識しました。メンバー選出が全体の活性化につながったと思います」と続ける。

「『できる人はできる、私には無理』と決めてしまう生徒が、本校には多いかもしれません。そこで、Aメンバーの生徒に意識的に授業で質問させたり、問題提起をさせたりしたこともあります。良い意味で生徒をかき回すことを意図しました」（寒河江先生）

「学校は中小企業・率先垂範」を掲げる上原校長も物理担当教師と共に、物理を苦手にしている成績中・下位層の学力底上げに立ち上がった。休日の特別課外活動を3年生を対象に21日間、計71時間にも渡って開いたのだ。もちろん、3学年全体での進路ガイダンスは何度も開いた。

新たなノウハウを吸収する若手教師たち

同校は、家庭を持つベテラン教師が赴任しづらいという立地であり、若手教師が多く赴任する。上原校長は「本校が赴任2校目という教師が多く、ここで指導力をつけて次校に異動するというパターンが多い」と話す。

「学力の高い生徒を伸ばさなければという思いは以前からありましたが、東京大や京都大に対応した指導のノウハウ、そして生徒の意識を引っ張り上げていく指導力がありませんでした。上原校長と2人の副校長が赴任してきて、学力の高い一部の生徒だけでなく、生徒全員と教師を巻き込み、学校全体での指導体制ができ上がりました。管理職による進路ガイダンスも、今まで経験したことがないようなものでした」（竿代先生）

寒河江先生も「外部の研究会に参加しても、ほかの進学校の先生は指導のノウハウをなかなか話してくれません。しかし、2人の副校長は隠さず話してくれます」という。

他県で開かれる講演会や研究会に鈴木副校長が講師依頼等を受ける際には、ほかの教師が積極的に同行した。竿代先生は「最難関大を目指す生徒とどのように向き合っていけばよいのかを勉強させてもらいました。刺激になりました」と話す。

中田先生は自身の授業の仕方が変わってきたと話す。

「かつては淡々と1人で授業を進めることもありましたが、校長や副校長の授業を参観する中で、生徒とのやり取りの大切さを学びました。そのためには、生徒への問いかけ方こそ工夫しなければならないと思い知らされました」

生徒、地域、そして教師に広がっていく自信

東京大、京都大合格者が出たことで、地域が活気づくと同時に学校内に二つの変化があった。

一つは、生徒の意欲の向上だ。同校の生徒の間には今、「先輩たちができるのなら、自分もやればできるのでは」という前向きな意識が強く芽生えてきている。

「教師にさせられているという感覚では、成果は出ないでしょう。逆に、生徒と一緒に学んでいく、生徒と一緒にいると楽しいという雰囲気は、塾などがなく、生徒との距離が近い本校のような地方の高校の方が、都市部の高校よりつくりやすいはずです」（寒河江先生）

もう一つの変化は、教師の自信の高まりだ。地元久慈市出身の中田先生は、近所の人から「ニュースを見たよ、すごいね」と声をかけられた。佐藤先生は、柔道の元オリンピック代表の同校OBから「誇りに思う」と言われた。後輩や地域を勇気づけただけではない。教師自身にとっての自信にもなった。

「1年間、日々、東京大・京都大の入試問題に向き合い、それを意識して指導したというのは初めてでした。今後、同じ思いでこの経験ができるかどうかわからないというくらい、私自身、教師として成長し、充実した1年でした」（中田先生）

東京大・京都大に合格した生徒はいずれも、私立大は1校も受けなかった。生徒のそうした高い志を支えたのも、教師たちの自信の高まりだ。

「合格実績を上積みさせるつもりは全くありませんでした。私立大を受けるエネルギーを、個別学力試験対策に使わせたかったからです。生徒に『私立を受けなくても大丈夫』と言いきれたのは校長や副校長のあと押しがあったからです。それが自分の自信にもつながりました」（竿代先生）

県教委の振興策と、現場教師の「地域のため」という心意気の一致。そして、両者をつなぐ管理職のノウハウ。これらが噛み合って、「目玉づくり」による学校の活性化は短期間で成果を上げた。ただ、寒河江先生は「地域の活性化を考えると、国公立大の合格者数をもっと増やしたい。それに目玉がつけば最高でしょう」と、満足はしていない。

「今年は4月1日を登校日にしました」と上原校長。「能力無限！」「おそるべし、久慈高生の潜在能力！」と上原校長の投げかける言葉に、今年もまた、生徒も教師も熱くなる。

図2　校長の講話プリント

校長の講話のポイントをまとめ、その都度、生徒に配付した

広島県立三次高校

「私たちの仕事は生徒たちの〝夢〟を〝目標〟に変えること」

三次市は
広島市から車で約1時間40分

成績上位層の校区外への流出を止めたい

広島県立三次高校の2008年度国公立大合格者数は62名。60名を上回ったのは、1964年以来、実に44年ぶりのことだった。

県北の雄――。今年、創立110周年を迎えた同校は、旧制中学を前身とした、県内の伝統校の一つ。ところが、長らく国公立大合格者数1桁という低迷の時代が続いたこともある。中山間地に位置するこの地域は、過疎化が進む。更に、学力の高い生徒は、瀬戸内海沿岸部の高校へと進学していくのが現状だ。04～06年度に、地元の三次市内の中学校から校区外の高校に進学した生徒は年間約200名だった。

三谷弘子先生は「なんとか流出を食い止めて、成績上位層が入学してくる高校にしなければならないという大きな課題がありました」と話す。

少子化による定員減を前任校で経験し、4年前に同校に赴任した溝口徹先生が続ける。

「当時、本校にはまだ生徒が集まっていましたが、前任校での経験上、早く動き始めなければと思っていました」

そうした状況に同校が置かれていたときに、赴任してきたのが田邊康嗣校長だ。05年度に着任した田邊校長は開口一番、教職員たちにこう言った。

「変わらなければ！」

続いて、06年度に田中清裕教頭が着任した。その当時の様子を、瀬尾充秀先生は「伝統校という名の上に、教師はあぐらをかいていた面が確かにあり、それをだれも打破できませんでした。そこに、志を持った校長とノウハウを持つ教頭が赴任してきたのです」と振り返る。

就職希望者にも全国平均を意識させる

同校の生徒や保護者は、都市部と比べて競争意識が低い。教師の間にも、競争や順位づけへの抵抗感が根強かった。だが、田中教頭は職員朝会でこう訴えた。

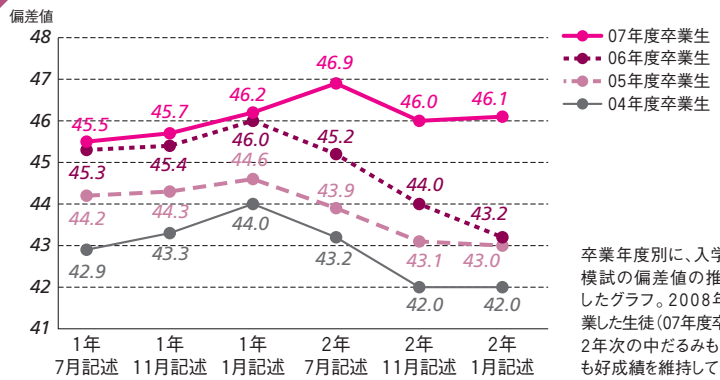
「150名が国公立大志望ならば、150名が合格できるように力をつけること。これが私たちの仕事なのではありませんか」

組織的に改革を推進できたのは、客観的な数値データがあったからだ。例年、2年生の7月以降、模試の平均偏差値が急下降していた（**図1**）。これを食い止め、全国のレベルを意識して偏差値50を超えるという目標を掲げた。

「大学受験を目的とする前に、全国の高校生の標準を知ることが模試の第1の目的です。就職希望の生徒も、全国平均値を超えれば就職先が広がります。高校生として当たり前のことを、当たり前にできるようになること。それが全国平均の意味だと何度も生徒と保護者に訴えました」（田中教頭）

それまでは1、2年生で終わっていた模試の全員受験を、就職希望者

図1 模試の平均点偏差値の学年別の推移



卒業年度別に、入学時からの模試の偏差値の推移を比較したグラフ。2008年3月に卒業した生徒（07年度卒業生）は、2年次の中だるみもなく、模試も好成績を維持していた

も含めて3年生の秋まで続けるようにした。

「クラブにはレギュラーもいれば、補欠もいます。それぞれの力に合わせて頑張ることがすばらしい。校内マラソン大会では順位がついて当然です。トップを走る生徒が速いペースで走らないと、全体のタイムは上がりません。これは勉強もスポーツも同じこと。引っ張っていくトップリーダーやまじめな雰囲気をつくる学習リーダーが必要です」（田中教頭）

個人の力量頼みから組織力による進路指導へ

改革のポイントは次の3点に集約される。

一つめは、それぞれの取り組みの理念を明確にしたことだ。例えば、進路検討会を開くとしても、なぜこのタイミングなのか、何が目的なのかを毎回明確にした。

二つめは組織力を高めたこと。同校では教師個人の技量による指導が多かったが、それを組織で行う体制をつくっていった。

「『もっと良い指導をしたい』という思いは、どの教師にもあるでしょう。その上で、以前は、授業も補習も各教師が自分のペースで行っていました。でも、必ずしも結果はついてきません。学校全体で動かなければ、生徒が希望する進路をかなえられないことを痛感していました」（早稲田浩太郎先生）

以前は進路検討会に学年の半数ほどしか参加しないこともあったが、クラス担任全員が参加するようにした。教科主任会議も定例化し、担当する授業ごとに生徒の模試成績を分析した。授業の進度や内容、テストの出題などについても各教科会で意思統一を図っていった。

三つめは、外部から進路指導のノウハウを積極的に吸収していったことだ。教師は、交代で全国の進学校を視察に訪れた。

「わかる授業、楽しい授業は得意ですが、成績上位層の生徒を引っ張り上げて伸ばしていく授業をしたことがありませんでした。全国レベルの進路指導を経験した教師が少なく、ノウハウがなかったのです。私自身、当初はなぜ指導方法を変えなければならないのか、どんなに話を聞いても納得できませんでした。しかし、全国区で実績を出している進学校の指導を視察する中で、いかに自分はまわりが見えていなかったか、競争に弱い状態のままだったかがわかりました」（三谷先生）

瀬尾先生も、「他校への視察によって、自分たちの指導がまだまだ不十分だということがわかり、謙虚になった教師が多かったと思います」と語る。「井の中の蛙ではよくない」という意識が学校全体に広がっていった。

合意形成を待たずに次々と新たな手を打つ

この2年間、数え上げたら切りがないほど新しいことを取り入れてきた三次高校。三谷先生は「教師全員の合意を得てから動こうとすると、膨大な時間がかかってしまいます。とにかく思いついたことは積極的に取り入れていきました」と話す。

例えば、06年度に2年生を対象に

◎後列左から

早稲田浩太郎
進路指導部、2学年主任（06年度3学年主任）

三谷弘子
進路指導主事、3学年副担任

田中清裕 教頭

◎前列左から

溝口 徹 進路指導部、1学年主任（06年度2学年主任、07年度3学年理数コース担任）

瀬尾充秀
進路指導部、3学年主任

School Data

設立	1898（明治31）年
形態	全日制／普通科、理数コース／共学
生徒数	1学年260名
08年度進路実績	国公立大には東北大、名古屋大、九州大、北海道大、広島大、島根大など62名が合格。私立大には同志社大、立命館大、関西学院大、関西大、近畿大、中央大、広島経済大、広島修道大など、延べ290名が合格。
住所	〒728-0017 広島県三次市南畑敷町155番地
電話	0824-63-4104
Web Site	http://www.miyoshi-h.hiroshima-c.ed.jp/

始めたのが、部活動後の午後6時から9時まで自習する「ナイトゼミナール」と、部活動前に自習する「水曜ゼミナール」だ。「難関大を目指す生徒や一生懸命勉強している生徒に学習リーダーになってほしい」（溝口先生）との考えから、教師が参加を呼びかけた生徒や希望者がナイトゼミには約70名、水曜ゼミには約50名が参加した。ゼミでは、私語・飲食禁止という基本的な学習姿勢を徹底させた。

日々の家庭学習時間の定着や生活実態を把握する目的で始めた「家庭学習がんばるノート」を、夏休みには部活動の顧問がチェックするなど学校全体で取り組んだ。

「一般的に、生徒は3年生になるとある程度、自学自習の仕方がわかるようになります。ところが、本校には塾に通っていない生徒が多く、自分一人だけで受験勉強をするのは難しい面がありました」（溝口先生）

そこで、補習の仕方を大きく変えた。以前はどんな補習を行うかは個々の教師に任され、生徒の出席人数にかかわらず多くの補習が開かれていた。こうした無駄を省くため、各教科会や教科間で連携を図り、教科ごとのカリキュラムを組み、同じ教科であればどの先生の補習を受けても進度が同じになるようにした。

成績上位層への働きかけも強化した。難関国立大受験に向けて意識を高めていくため、難関大に合格する可能性を持つ生徒に対し、2年次の秋から面談を実施。難関大受験に対して消極的な生徒には、国立大の魅力や研究内容、経済的な優位性などを伝えた。模試の結果分析に基づいて、教科担任が面談を行うようにもした。

「『どうしてあの子たちだけ特別なの？』という思いをほかの生徒にさせてしまっては失敗です。成績の上位・下位を問わず、模試の成績が大きく落ち込んだ生徒にこそ、丁寧な面談を心がけるようにしました」（溝口先生）

3年次には、難関大志望者だけでなく、ほかの進学志望の生徒も対象として、主に個別学力試験対策の個別指導を行った。担当には、3学年の教師だけでなく、1、2学年の教師も加わった。

大学進学も、就職も、「全員で受かろう！」

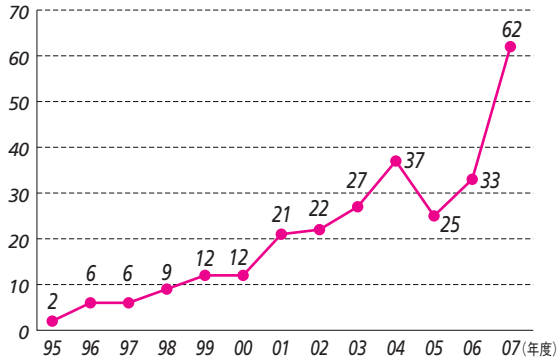
08年1月以降も、既に志望大に合格したにもかかわらず、補習に顔を出す3年生の姿があった。三谷先生は、「こんなことは、私自身初めての経験でした」と喜ぶ。溝口先生も「『全員で受かろう！』という雰囲気が、以前より強くなったと思います」と振り返る。

入学当初、保護者から「うちの子は大学なんてとても無理です。専門学校でいいんです」と言われていた生徒が、公立大に合格した。国立大を受験したものの合格できなかったある生徒の保護者は、「うちの子がまさか国立大を受けられるとは思いませんでした。受験ができただけで十分です」と、担任に話したという。溝口先生は、「生徒や保護者の思いを受け止めることの大切さを改めて痛感しました」と話す。

国公立大合格発表後、新3年生の補習受講の申し込みが一挙に増えた。「生徒の間に、『自分たちも頑張ろう』という意識が高まっています」と、瀬尾先生は嬉しそうに話す。早稲田先生は、「数学の授業では、復習中心から予習中心に内容を180度変えることを検討しています」と意欲を燃やす。08年度からは45分・7時間授業を始めた。同校の変革の歩みは、立ち止まるどころか、むしろ加速している。

「この地域の生徒たちは、本当に素直で、高い潜在能力があります。私たちの仕事は、夢を目標に変えること。早い段階から鍛えれば、国公立大に100名合格できるだけの能力を持っている生徒たちだと私は確信しています」（田中教頭）

図2 三次高校の国公立大合格者数の推移（卒業年度）



能登 和倉温泉 **加賀屋**

クレームとエピソードを通じて伝承される接客の精神

マニュアルを超えた“気働き”が日本一を支える

客に応じた臨機応変な対応を求められる接客業は、新人教育が難しい業種だといわれている。
「プロが選ぶ日本のホテル・旅館100選」で28年連続総合日本一という記録を誇る
加賀屋を訪ね、サービスやもてなしの精神が
どのように若い世代に受け継がれているのか、話をうかがった。

能登 和倉温泉 加賀屋 Profile

かがや　能登（石川県）和倉温泉の老舗旅館。1906（明治39）年創業。風光明媚な立地と丁寧な接客が評判を呼び、「プロが選ぶ日本のホテル・旅館100選」（旅行新聞新社主催）において81年以降、28年連続総合日本一を獲得する。客室数246部屋。社員数はパート・アルバイトを含めて約800人。

加賀屋社長 小田孝信

おだ・たかのぶ　加賀屋4代目社長。
慶應義塾大学卒業後、旅行会社勤務を経て家業を引き継ぐ。

クレームの周知と分析が〝気働き〟のヒントに

加賀屋は、能登半島の七尾湾に面した和倉温泉に位置している。能登空港から車で約50分と、必ずしもアクセスのよい立地条件でないにもかかわらず、年間30万人を超える宿泊客が訪れる。宿泊客の目当ては、温泉や料理もさることながら、加賀屋伝統の〝心づくしのおもてなし〟であるとされる。他の旅館では味わうことのできない極上のもてなしが、28年連続日本一という記録を支えている。

加賀屋の従業員はパート等も含めると約800人にのぼる。その内、宿泊客を担当する接客係は約200人。2008年3月には22人の新入社員を採用した。

新入社員はまず1週間の集中講義によって、挨拶や礼儀作法などの基礎教育を受ける。その後2か月～2か月半にわたり、先輩の教育係に付き添いながら実際の接客を手伝い、業務の基本を学ぶ。そして入社3か月後に行われる社内審査に合格すると、1人で宿泊客を担当することになる。

だが、この教育期間だけで、〝もてなしの心〟を新入社員に教え込むことは難しい。客に応じた臨機応変な対応は、マニュアルにはしにくいものだからだ。3か月の社内教育を経た後も、自然なもてなしが身に付くまでは常に考え、学び続けることが求められる。

では、加賀屋ではどのようにして、接客の姿勢と精神を社員たちに伝えているのだろうか。まずは、小田孝信社長に接客のポリシーから聞いた。

「加賀屋ではモットーとして、『笑顔で気働き』を掲げています。もちろん接客マニュアルも作成していますが、『規則ですから』とマニュアル通りの対応をすると、逆にお客様には失礼にあたり、お叱りを受けることも多々あります。マニュアルはあくまでも基礎であり、その応用こそが気働きになるわけです。しかし、マニュア

能登 和倉温泉 **加賀屋**

クレームとエピソードを通じて伝承される接客の精神

マニュアルを超えた“気働き”が日本一を支える

加賀屋の姉妹館「あえの風」の接客風景

ルと気働きの境を新入社員に伝えるのはたいへん難しい。そこで大切にしているのがお客様のクレームです。クレームの内容を分析すると、『こう対応すればクレームにはならなかった』ということが見えてくる。クレームは気働きの大きなヒントになるのです」

加賀屋では、客から受けたクレームをすべてまとめて「クレーム白書」を作成し、クレームの再発防止を徹底している。また、年に3回、全社員を集めての「クレームゼロ大会」を開催し、「クレーム大賞」の表彰も行う。クレーム大賞は大失態を演じた社員に対する表彰である。

「クレーム大賞は決して吊るし上げのためにやるのではありません。大きなクレームは、それを分析して解決策を社員にフィードバックすることによって、むしろ加賀屋の財産になる。だからこそ、こうした表彰を行っているのです」（小田社長）

クレームを単なる苦情ではなく、〝奇貨〟として受け止めることで、マニュアル化できない気働きのノウハウを社員一人ひとりに蓄積していく。この点に関しては、新入社員の教育係を務める長子さんもまったく同じ考えだ。

「新人の失敗談は、新人全員が集まるミーティングで披露してもらっています。失敗の中身については厳しく叱りますが、その後に必ず『勉強させてもらってありがとう』という言葉を付け加えます。クレームは加賀屋で働く私たちの肥やしにもなるからです」

新人のやる気を向上させるアットホームな環境づくり

しかし、クレームを受けた当人は、そこまで納得して

素直に発表できるものではない。表彰や失敗談の公表は、下手をすれば社員の強い反発を招きかねない。だが加賀屋には、そんな反発を生じさせない独特の風土があるようだ。

その一つは、新人を言葉だけで指導するのではなく、自ら率先して行動してみせることで教え込んでいくという伝統である。長子さんは、「教えることを必ず先にやって見せる」という。入社したばかりの新人社員も、「長子姉さんの指導にはとても説得力があります。まずは姉さんがやって見せてくれて、その後に『いっしょにやってみなさい』とおっしゃるからです」と語る。

加賀屋のもう一つの風土は、アットホームな雰囲気づくりを重視している点だ。小田社長は「加賀屋は企業ではなく家業」だというが、こうした考え方も、日々の体験を通して新人たちの心にしっかりと焼き付けられていく。例えば次のような新入社員の言葉があった。

「会長や女将さんも社員食堂で食事をしているし、館内ですれ違うと必ず『お疲れさま』といってくれます。同じ職場で同じ方向を向いて仕事をしているということを、強く実感します」

長子さんも、「新人は自分の孫だと思って接している」と語る。加賀屋ではアットホームな雰囲気を大切にすることによって、新入社員への教育が〝指導〟ではなく、〝親心〟として受け入れられているのである。こうした先輩社員の心情が確実に新人に伝わっていることは、次のような新人の言葉からも読み取れる。

「長子姉さんは、『注意するのは期待しているからだよ』といってくれました。立派に成長した姿を早く姉さんに見せたいです」

エピソードを通じた感動と実感を伴う伝承法

クレームの分析と社員へのフィードバックが、気働きという〝伝えにくいもの〟を伝えるための第一の方法だとすれば、第二の方法が気働きの具体例をエピソードの形で伝承しているということだ。例えば長子さんは、新人に対して事あるごとに次のようなエピソードを語って聞かせている。

「ある家族のお座敷の世話をしていると、電話器の横におじいさんの写真が置いてありました。それを見て、本当はこのおじいさんもいっしょに加賀屋に宿泊する予定だったのにお亡くなりになったのだと気付き、黙って一膳多く据えると、家族全員が感激してくださいました」

気働きの本質が〝臨機応変の気遣い〟だとすれば、それを公式のように決まった形で伝えることは不可能だ。しかし、こうしたエピソードとして語ることによって、気働きを発揮する間合いや、客が何に感激するのかを直感的に理解させることができる。そこに感動という要素が加わることによって、気働きは、新人の血肉となって定着していくのではないだろうか。

加賀屋では新入社員研修の座学でも、いくつものエピソードが幹部の口から語られる。ある新人がこんな話を披露してくれた。

「常備していない県外の銘柄の日本酒をお客様がご注文になったとき、『置いておりません』と答えずに、即座に車を飛ばして県外まで買いに走ったという専務の話を聞いて、加賀屋はそこまでやるのかと驚きました」

仕事の意義を明確にすることがプライドとモチベーションを生み出す

社員のモチベーションの維持も重要な社員教育の一環だ。「連続日本一の記録を途絶えさせるな」と上からいってみたところで、社員はその気にはならない。働くことの意義を明確に伝えることで、社員のモチベーション維持に努めている。

「まず、社員一人ひとりの気働きが、会社の利益に直結しているのだとはっきり伝えています。例えばお客様との会話で誕生祝いでお見えになったことに気付き、小さなケーキをお出しすることはコスト的にはほんのわずかなことでしかありません。しかし、そうしたおもてなしに多くのお客様が感動してくださるのであり、その積み重ねは確実に加賀屋の繁盛につながるわけです。社員の気働きが会社の評価に直結していると共に、自分の給与にもつながっているのだと分かってもらうわけです。

それと同時に、加賀屋にお客様がお越しになることで旅館の取り引き会社や温泉街の商店なども潤い、地元に大きく貢献しているということも社員に話します。我々は、仕事を通して地域貢献を果たしているのだという意識は、社員にとってこの上もない誇りになっています」（小田社長）

このように自分たちの仕事の意義を明確にし、繰り返し訴えることで、加賀屋で働くことは社員のプライドとなり、高いモチベーションが維持されるのだ。クレームを生きた教材とし、教える対象を家族の一員として処遇し、使命感の付与によって意欲を向上させる。こうした教える知恵によって、決してマニュアル化できない〝もてなしの心〟は次代へと受け継がれていくのである。

教師の思い、メッセージを生徒に効果的に伝える！ 生きたデータの見せ方・つくり方

今月のテーマ

受験へ向けた3年生保護者への意識付け

指導の重要性

受験を控えた3年生の保護者に対しては、タイミングに応じた情報発信、サポートが他学年以上に重要になってくる。しかし、いつ、どのような情報、サポートが必要になるかは、保護者や生徒の進路観とその醸成のスピードなどによって異なってくる。保護者の状態とニーズをキャッチするためにも、一方通行ではない双方向のコミュニケーションに基づいた働きかけを行うよう留意したい。

※データは、高校の先生方へのヒアリングを基に編集部が作成したサンプルです。

はじめに 保護者の現状とニーズを把握する

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

ダウンロード

❶ 事前準備シート

1. 受験に向けて不安を感じている
   YES　NO
2. 1日の親子の会話は
   ほとんどない　15分未満　15分以上
3. 現在の子どもの志望先を知っている
   YES　NO
4. 子どもの志望校の現在の合否判定を知っている
   YES　NO

A. 受験に向けて不安にお感じのことがあればご自由にお書きください

B. お子さんへの日々のサポートで心がけていることをできるだけ具体的にお書きください

保護者の全体像を集計

例

◎受験への不安の有無

不安を感じている	不安を感じない
65%	35%

◎1日の親子の会話

ほとんどない	15分未満	15分以上
38%	40%	22%

フリーアンサーから保護者のタイプを分析

Ⅰ.漠然とした不安を抱える保護者
例 「学校でどれくらいの成績ならどんな大学に合格できるのだろうか」→P.47

Ⅱ.合格可能性に興味を持っている保護者
例 「今の子どもの成績で志望校に合格できるのだろうか」→P.48

Ⅲ.支援の仕方がわからない保護者
例 「子どもが受験生になったが保護者として具体的に何をすべきなのか」→P.49

データ作成・加工のPOINT

保護者が「学校の言っていることは難しい」と思ってしまうと、学校から距離を置かれてしまう。個々のニーズを引き出して、具体的に応えながら、保護者との信頼関係を早期に構築し、保護者が大学受験を子どもの成長につなげられるようにしたい。❶の「事前準備シート」を保護者会や3者面談の前に配付すれば、回答から保護者の状況が把握でき、上記のようにタイプ分けによって面談で対応すべき内容が見えてくるだろう。クラスや学年の動向を数値化して保護者にフィードバックすることで、双方向性を維持してはどうだろう。

プラスαの一工夫

保護者の反応に具体的行動で応える

❶のような「事前準備シート」を活用した際に大切なのは、保護者の反応に教師も具体的な行動で応えることである。忙しい中、学校の求めに応じて記入したのにそれに対して何のフィードバックもなければ、学校の取り組みに対しての反応も次第に鈍くなってくる。保護者全体の特徴が見えてくる結果は、データ化して保護者会資料や学年通信に盛り込み、今後維持すべき点や改善点などを周知する。個別に回答する必要のあるものに関しては関連資料などを添えて3者面談当日に言及するなど、多様なニーズに応えたい。また、どのケースにどの資料を用いるか、担任団で情報交換することで、面談のスキルアップにつながるだろう。

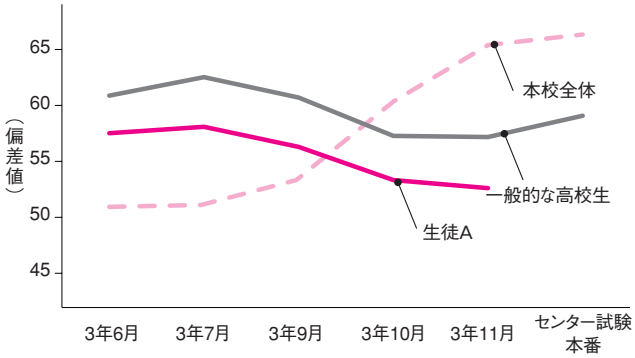
タイプⅠ

「漠然とした不安を抱える保護者」への対応

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

ダウンロード

❷ 学校の成績推移との比較データ



❸ 志望大の合格者平均偏差値と国公立大合格者数

年度	国公立大合格者数	○○大経済学部の合格者数	○○大経済学部の合格者平均SS
08	123	14	SS59
07	115	11	SS60
06	108	10	SS61
05	140	15	SS59

❹ 学部系統情報

学部系統	動向
文学系統	地元国立A大の文学部は、フィールドワークに定評のある史学科に全国から多くの学生が集まっている。なお、最近は異なる学問領域を融合させた学際的な学科が数多く誕生しているが、このA大の文学部にも国際文化学科が新設された。本校からは首都圏B大、C大の文学部に例年一定数進学しているが、両大学の中でも心理学科、教育学科が人気も合格ボーダーラインも高くなっている。
法学系統	将来法曹を目指すかどうかで、志望大選択の視点も異なってくる。地元国立D大は法科大学院を設置し、授業内容などの評価も高い。D大と難易度では同レベルの地方E大も法科大学院に定評がある。また、首都圏私立F大は、キャリア教育が充実しており、法学部の就職率も非常に良い。特に、大手企業への就職状況は注目すべきものがある。
工学系統	隣県国立G大は、長い伝統を持つ機械工学科がよく知られており、この地域の優良企業に例年多くの学生が就職している。理系の場合、最近は大学院進学が一般的になっており、地方H大は、工学部生の80%近くが進学している。しかも多くの学生がH大の大学院に内部進学しており、研究をスムーズに継続できる環境にあるといえるだろう。

データ作成・加工のPOINT

❶の事前準備シート（P.46）のフリーアンサーから、「入試に向けて漠然とした不安を抱えている」と分析された保護者に対しては、「大学入試に向けた取り組みといっても、特別なことを行うわけではなく、日々の授業と予習復習を中心にした対策が基本になる」ということを説明する。3点固定（起床時間・学習開始時間・就寝時間）を基本とした日々の生活のリズムを整え、予習・授業・復習の学習サイクルを確立すれば、例えば❷のように成績は秋以降に上昇することを示したい。そして、❸で教師の指導力や進路指導体制が生徒の頑張りを支え、一定の成果を出していることを伝える。また、❹のように最近の学部・学科の動向など、進路選択のための情報を提供することも重要だ。まず、自校の生徒に人気のある地元大の情報を紹介しながら、他地域の大学の動向も織り交ぜ、保護者の視野を全国へと広げていきたい。

プラスαの一工夫

「受験生の保護者」としてのポイントを提示する

学校としては、受験生の保護者にまずこれだけは知っておいてほしいというポイントを具体的に提示すると、不安の払拭に効果的。07年度4月号の本コーナーの『「受験生の保護者」として知っておきたいポイント』などが参考になるだろう。特に、初めて受験生を持つ保護者には、複雑な入試システムを一度に理解してもらうことは難しいが、理解に努める姿を見せることが、子どもの安心感や粘りを育むことを伝えたい。

大学・学部情報は学年団でまとめる

大学・学部情報については、1人の教師がすべての学部系統の状況をまとめようとすると、負担が大きくなってしまう。学年団で分担して作業するなど、個々の作業の負担を少なくするようにしたい。なお、保護者向けの大学・学部情報は、あくまで最新の大学情報への興味を喚起することと、遠方を含めた全国の大学を視野に入れることである。学部系統の動きを総論的にまとめる必要はなく、一例を挙げて「最近はこんな新しい学科ができている」「遠方にもこんな魅力的な大学がある」ことを知るきっかけづくりという観点から簡潔な資料を作成したい。

ダウンロード このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/ →HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

タイプⅡ

「合格可能性に興味を持っている保護者」への対応

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

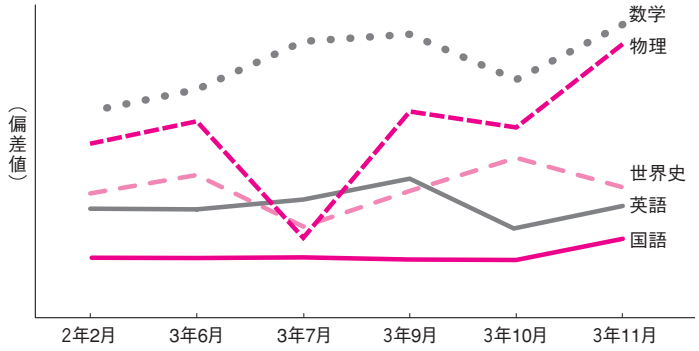
❺大学合格者・不合格者の教科別平均偏差値(入試結果調査〔ベネッセ〕より)※1

大学・学部　等					教科・科目名					
					国語	数学	英語	地歴公民		
								全体	地理	日本史
					SS	SS	SS	SS	SS	SS
○○大	工	機械工	前	合格	68.0	62.6	67.2	63.4	61.7	64.4
				不合格	62.4	56.9	61.2	59.1	57.8	59.3
				差	5.6	5.7	6.0	4.3	3.9	5.1
				センター	●50	●50	●50	●50	○選択	○選択
				個別	●200	●250	●200	-	-	-

■保護者に説明する際のポイント

- 合格者と不合格者の平均偏差値（SS）の差が大きい教科・科目が、合否の鍵（その教科・科目は得意か?苦手か?）になっていることを伝える
- 配点の高い教科・科目を軸に、学習計画を立てることが大切であることを伝える
- データの中に入試の専門用語が含まれている場合は、口頭で説明するだけでなく、注釈として用語の解説も記載するようにする
- 合格者と不合格者の度数分布などのデータを必要に応じて併用し、複合的な分析・説明を行う

❻生徒個人の5教科の成績推移（FINE SYSTEMより）



●保護者に伝えるポイント
入試で配点が高く、合格者と不合格者の間で差がつきやすい数学で好成績を収めていることは合格に向けての好材料。その一方で、やはり合格者と不合格者の間で差がつきやすい英語の成績が安定していないことが不安材料であるので、対策が必要だ。

データ作成・加工のPOINT

❶事前準備シート（P.46）のフリーアンサーから、「合格可能性に興味を持っている」と分析された保護者は、入試の仕組みなどに対して一定の知識と理解を持っている半面、模試の結果に一喜一憂しやすい傾向がある。そのようなタイプの保護者には、生徒の志望大の入試特性や本人の学力特性に踏み込んで、合格までのプロセスへの理解を求める。❺のデータを用いて、大学・学部ごとに入試特性があることを説明すれば、「志望大の入試科目・配点などの特性を把握した上で、総合点で合格ラインに達するように、生徒は計画的に入試対策に取り組んでいること」を理解してもらうことができるだろう。同様に、❻のように模試の成績推移から生徒個人の学力特性を分析し、各教科・科目の強み弱みが入試にどのような影響を与えようとしているのかを見通せるように話をしてみるとよいだろう。

プラスαの一工夫

入試方式別の入試特性を紹介する

国公立大の合否はセンター試験と個別学力試験の総合判定で決められるため、二つの試験を見通した対策が必要であることを説明する際に合格者の度数分布が役に立つ。また、それ以外にも、入試科目数の異なる大学・学部を比較して、「いわゆるアラカルト入試では一つのミスが合否を左右するような厳しい入試になることが多く、できるだけ5教科を粘り強く学習する方が結果的に入試を有利に展開できること」を伝えることもできる。本人の学力特性を生かすという観点を保護者に是非喚起したい。

保護者によって面談の内容を変えていく

現時点での合否判定に悲観する保護者には、❻を見せることで、「今の総合判定はまだ芳しくないが、配点の高い数学の成績が上昇傾向にあるので、入試直前まで伸びが期待できる」など、今後の学力の伸びを踏まえたアドバイスと学校の覚悟を確信に満ちた表情で伝え、保護者を支えたい。このような内容の3者面談をすべての保護者に対して実施することは、時間的な制限などにより実際は難しいかもしれない。だからこそ、P.46❶のような準備シートにより、どの保護者にどんな面談が必要かを事前に確認しておくことが、クラス全体の面談の効率化につながる。

※1　このデータは、Benesse High School Online（http://www.fine.ne.jp）で6月10日からご覧いただけます。
→ログイン＞入試情報を調べる＞2008年度入試結果情報＞入試結果データ集

ウェブサイトからダウンロード!

Benesse® 教育研究開発センター

http://benesse.jp/berd/

生きたデータの見せ方 検索 クリック!

HOME ＞情報誌ライブラリ（高校向け）
＞生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください。

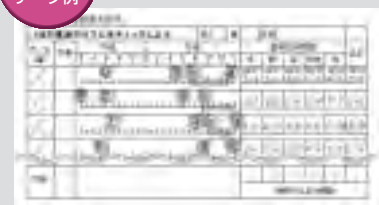
加工可能な資料がダウンロードできます！

このコーナーで紹介してきた図版や関連する図版は、加工可能な形でウェブサイトにアップする予定です。
学校の実態に合わせてご活用ください。

- 事前準備シート
- オープンキャンパスワークシート

…などです!

人気のダウンロードデータ例



学習の記録（生活時間帯併記型）

生徒に自らの学習状況を客観的に把握させ、具体的な改善点や安心材料を指摘するためのツール。起床・帰宅・学習開始・就寝の時間を固定させ、生活のリズムを整えさせてください。

先輩が進路を決めた理由（部分）

面談などの場で生徒に提示すれば、先輩の進路決定の道のりを見ながら、「では、自分はどのように決めていくのか」を模索するきっかけとなるツールです。

タイプⅢ「支援の仕方がわからない保護者」への対応

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

ダウンロード

❼ 高校生の保護者として押さえておきたいポイント

月	子どもの目標	保護者のサポート
夏休みまで	苦手科目克服を中心に基礎固めを行う。1、2年生までの進路学習の成果を踏まえて、志望大を複数ピックアップし、志望順位を考える。	この時期に規則正しい生活のリズム（食事や就寝、起床の時間を一定にするなど）を身につけさせる。全国に目を向けて、どのような大学・学部があるか子どもと話をする。
夏休み	基礎固めを完了し、実戦力育成へと移行していく。1か月、1週間単位で学習計画を立て、それを実行することで、受験勉強のリズムを身につける。第1志望大と併願大について考える。	学校が休みの間に生活のリズムが崩れないように注意する。入試間際になって志望大選びで子どもと齟齬が生じないように、親の希望や考え（遠方の大学に1人暮らしで通えるのか、など）をこの時期に伝えておく。
9月～10月	実戦力養成を続ける。模試結果を分析し、科目の強み弱みを把握する。ただし判定に一喜一憂しない。センター試験を目標に、学習計画を練り直す。	模試の成績に一喜一憂しない。夏休みの学習の成果が出るのは11、12月。保護者が焦っては子どもも不安になってしまい、学習に集中できない。子どもと同様に、保護者も諦めないことが大切。

❽ オープンキャンパスワークシート

◎キャンパスと学生の雰囲気
好き・普通・嫌い

◎（自宅・下宿からの）通学時間
（　　）分

◎子どもが学びたい学問が学べるか
学べる・学べない・わからない

◎子どもが就きたい職業に有利か
有利・不利・わからない

◎子どもが取りたい資格に有利か
有利・不利・わからない

◎図書館や研究施設の充実度は
十分・普通・不十分

◎大学周辺の環境は
良い・普通・悪い

◎奨学金制度の充実度
十分・普通・不十分

◎留学や就職などのへの支援体制
十分・普通・不十分

データ作成・加工のPOINT

「入試に向けて、具体的に何をすべきかよくわからない」という保護者には、❼のように合格までの「保護者の役割」を時系列で具体的に示すとよい。また、子どもの志望大のオープンキャンパスに参加して、子どもの進路観に近づき、共感することを勧める。❽のようなワークシートで志望大に対する印象を整理してもらえば、子どもの受験大選択に納得できる。あるいはもっと別の視点で大学を選ぶべきだと感じたときに、保護者として子どもに対して具体的にアドバイスできるはずだ。

プラスαの一工夫

保護者にこそチャレンジ精神を喚起する

大学受験に対応するために、特別な環境や能力が保護者に要求されるわけではない。結局、今日という1日を親子共々しっかりこなしきるほかない。面談や学年通信を通じて、その過程にこだわり、子どもが頑張り抜ける環境を整えるための日常生活の具体的なポイントを紹介するなどしたい。そのことを通じて、大学受験が子どもの成長に結び付けられる可能性を秘めているものであることを示唆し、励まし続けたい。

ダウンロード このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/ →HOME ＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

変えるべきは大胆に変える勇気が必要

4月号特集「生徒の未来、教師の役割」でのお茶の水女子大大学院・耳塚寛明教授の「一斉講義型の（中略）固定観念を捨てて、大胆に授業形態を改編する決断と行動力が求められているのです」という言葉が印象に残った。自分も含めて、自分の経験によって形づくられた固定観念を捨てられない教師が多いと感じている。これだけ、教育を取り巻く環境が変化してしまった現在、真に不易なるものとそうでないものをはっきりと見分け、変えるべきは大胆に変える勇気が必要であると痛感している。

［千葉県立佐原高校・田中三郎］

新年度を迎えて

昨今の生徒の意識は、教師側から見るとやはりその変化が感じられる。新入生を迎え、前年度との比較が職員室で話題になり、「昨年とも少し違うね」「今年は受け身の生徒と活発な生徒がはっきりしているね」などあまりよくない感じで評価するところがある。「進学校」としての考え方がまた揺らぐ感じのする新学期を迎えている。

［北海道・匿名希望］

4月号の福岡県立城南高校の記事を読んで

城南高校にとって、全国的に知れ渡った指導方法を継続することの方が「楽」である。それは「ドリカムをやっていて実績が上がらないのは、生徒が悪いからだ」と言い訳できるから。しかし、城南高校は「ドリカム」の進化を選んだ。それは、実力がある教師が集まっている証拠でもある。誌面には、赴任間もない教師らが紹介されていた。城南高校には、生徒用ばかりでなく教師用ドリカムプランがあることが見えた。

［静岡県・匿名希望］

難関大の問題を解く経験が授業に生きる

4月号の「指導変革の軌跡」で紹介されていた福島県立磐城高校の大学入試問題研究から、若いころに聞いたある先輩教師の言葉を思い出した。「とにかく入試問題を解け。北から南までの全大学の問題を解け。それが、自分の授業に生きる」と。それをすべて実践したわけではないが、難関大の問題を解いた経験は、どんなレベルの生徒に対しても授業に生かせると思う。

［愛知県立安城東高校・江崎寛］

経済格差と教育格差を実感

家庭の経済格差と教育格差は、実際、強く感じている。地方の私学で進路多様校である本校では、授業料は決して安いとはいえない額である（県内でも上位）。減免や授業料の滞納が年々増えており、保護者の生活力の低下がうかがえる。対照的に、授業料の安い公立上位校の保護者に富裕層が多く、教育費を更につぎ込むことができるので「格差」は広がるばかりである。

［匿名希望］

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume 2

教育最前線からのホットな話題を紹介します

教師川柳

よくもまあ 親子の似たり 面談日

埼玉県・氷川の杜

『VIEW21』へのご意見・ご感想をBenesse教育研究開発センターのウェブサイトからお寄せください

下記の手順でアクセスしてください。

① 「Benesse教育研究開発センター」のトップページの「情報誌ライブラリ」の「高校向け」のプルダウンメニューをクリックしてください。

②画面右端の『VIEW 21』の表紙の下にある「読者アンケートにご協力をお願いします」をクリックしてください。

③入力フォームが表示されますので、ご記入の上、送信してください。

小誌に対してお寄せいただいた「全国の読者の声」がウェブサイトでご覧いただけます。

http://benesse.jp/berd/

編集後記

生徒が望む進路を実現させるためには、手をかけなければならない。でも、それが行きすぎると、かえって生徒の自主性を奪ってしまう……。学校は、生徒の「自立」を理想としながら、一方では生徒の気持ちや保護者の願いを受け止めて、現実の課題を解決していかなければならない「教育の場」なのだということを改めて理解しました。（小泉）

VIEW21 6月号 Vol.2　2008年6月6日発行

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション　Benesse教育研究開発センター
印刷製本　大日本印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　二宮良太、山口慎治、山田清機
撮影協力　川上一生、川本聖哉、蘓野孝行

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部
〒163-1422　東京都新宿区西新宿3-20-2　東京オペラシティタワー22階
電話　03-5371-1238

©Benesse Corporation 2008

VIEW21 2008 September 9月 Volume 3

次号は 8月27日発行（予定）
『VIEW21』高校版は年6回の発行です